

第Ⅲ章 親たちの教育観と学校期待



この章では前章の子育てからみた学校期待に対し、親たちのもつ学校期待が子どもたちの通う学校に対しどのような形であらわれているかを、通学校に対する認識度、卒業時に

達成できそうなこと、さらには高校生や高校教育は本来どうあるべきものと考えているかの3つの観点から検討してみたい。

1. 通学校に対する認識

子どもの数が減少してきた今日、親は子どもの教育にきわめて熱心で学校のことを実によく知っているといわれる。またPTA活動の活発な学校にあっては、先週土曜はPTAの文化活動の会合、今週はクラス保護者会、来週はPTAの委員会と毎週のように学校に来る保護者も少なくない。今回の調査では61.5%が親子で学校のことをよく話し合うと答えている(第Ⅱ章表Ⅱ-3)。親たちは子ども

との話し合いや日頃の学校との関係の中で、学校に関するどのような事柄を知っているかをまとめたものが図Ⅲ-1である。クラス担任の名前や子どもの参加している部活動といった直接子どもに関係のあることに関しては90%を越す認識率である。定期テストの回数や大学・短大の合格率といった学校の教育内容に関する認識率となると60%、校章の由来、校歌のメロディー、PTA会長名といっ

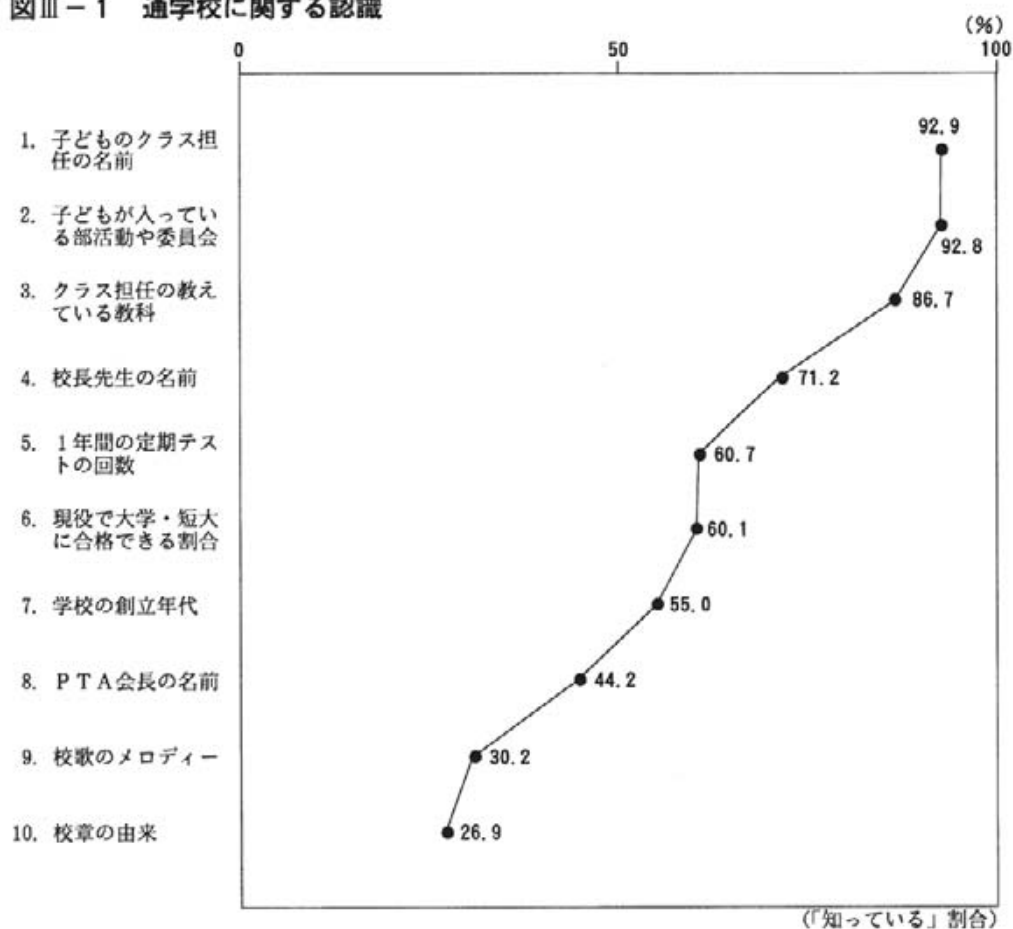
た学校の伝統や外郭的活動に関することになると20%台から40%台の低い認識率となっている。

図Ⅲ-2は生徒の性別による相違を検討したものである。全体の傾向には差がないものの女子生徒の親は子どもに直接関係することに認識率がより高く、男子生徒の親は教育内容に関する認識率がより高いといえる。同様

のことは父親、母親の対比においてもいえる(巻末・資料2基礎集計表参照)。

表Ⅲ-1は親の学歴と年齢による相違を検討したものである。父親の学歴別では高学歴層に教育内容に関する認識率が高い傾向がある。クラス担任の教えている教科や現役で大学・短大に合格できる割合では大卒の父親が他の学歴より高い認識率をもっている。母親

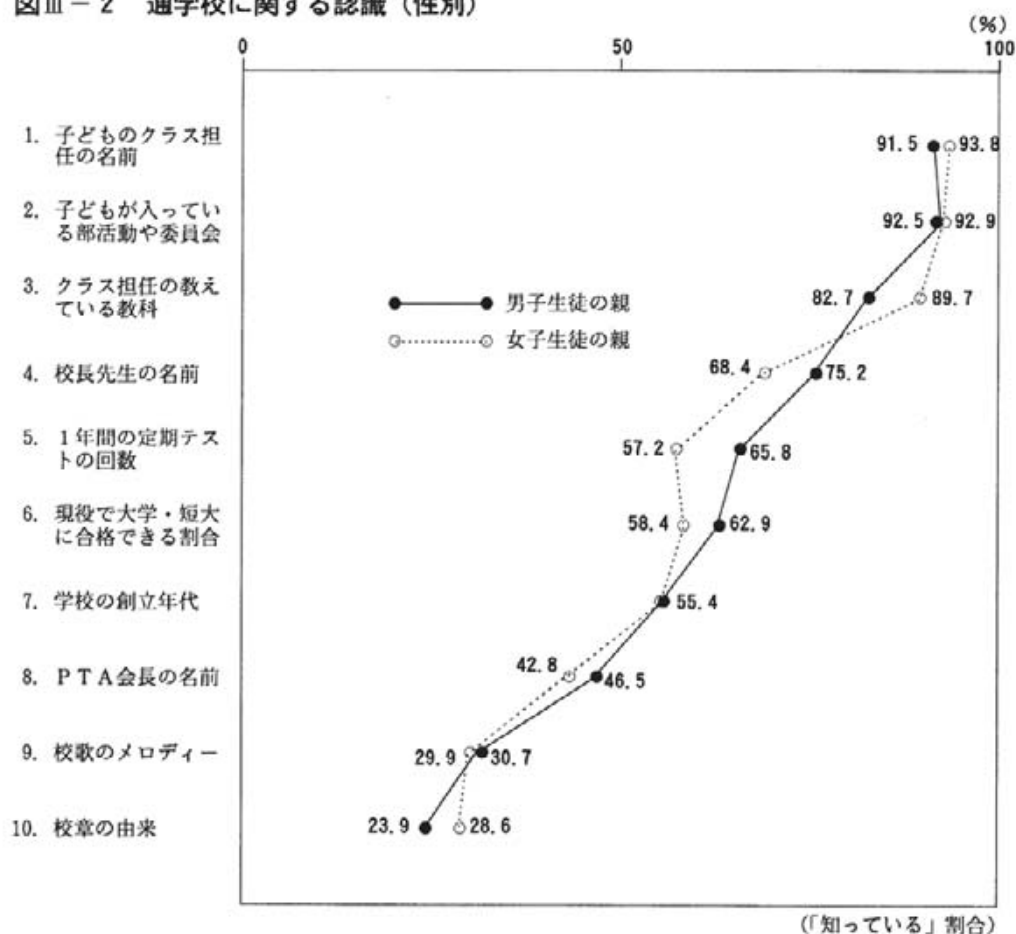
図Ⅲ-1 通学校に関する認識



の学歴別では高学歴者がすべての項目に高い認識率を示し、とりわけ現役で大学・短大に合格できる割合では70.3%の高認識率である。年齢別では36～40歳の若い層が子どもに直接関係する事柄に、46～50歳のベテラン層が定期テストの回数など教育活動の内容に関する認識率が他の年齢層より高い。

今回の調査校はそれぞれ地域の進学校で伝統や名声をもつ所が多い。しかし親たちはそうした学校そのものに対する認識をあまりもっていないことがわかった。また、父親や高学歴層、46歳以上の年齢層の母親に、教育内容に対する認識率がより高くあり、1つの学校期待層を形成しているといえそうである。

図Ⅲ－２ 通学校に関する認識（性別）



表Ⅲ-1 通学校認識と親の学歴・年齢

(%)

	父親の学歴				母親の学歴				年齢			
	中卒	高卒	短・専卒	大卒	中卒	高卒	短・専卒	大卒	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳
1. 子どものクラス担任の名前	95.3	93.0	94.4	92.3	89.4	93.7	92.3	94.1	95.7	92.6	94.7	88.7
2. 子どもが入っている部活動や委員会	92.9	92.6	96.6	93.3	85.4	93.5	92.6	96.0	92.2	94.2	91.8	87.1
3. クラス担任の教えている教科	83.7	86.6	86.5	88.4	68.2	87.4	89.9	94.0	92.9	86.0	88.3	83.1
4. 校長先生の名前	76.6	68.2	78.7	71.9	67.9	69.7	74.4	78.2	75.2	70.9	70.8	66.2
5. 1年間の定期テストの回数	57.0	61.9	61.8	60.2	56.0	61.2	59.6	68.3	56.0	58.0	69.2	64.8
6. 現役で大学・短大に合格できる割合	52.3	59.2	61.8	64.0	48.8	59.2	61.3	70.3	56.7	60.3	61.9	60.6
7. 学校の創立年代	46.5	56.2	59.8	57.3	40.0	56.3	57.1	53.5	44.0	54.5	61.4	57.7
8. P T A会長の名前	46.1	43.3	48.3	43.6	42.9	43.2	48.5	44.0	42.6	44.4	45.0	45.1
9. 校歌のメロディー	23.8	28.7	27.3	36.9	22.9	28.1	35.8	42.6	22.7	30.7	32.4	34.3
10. 校章の由来	17.2	26.4	28.4	30.4	14.3	26.1	26.7	42.6	17.7	26.4	32.1	25.4

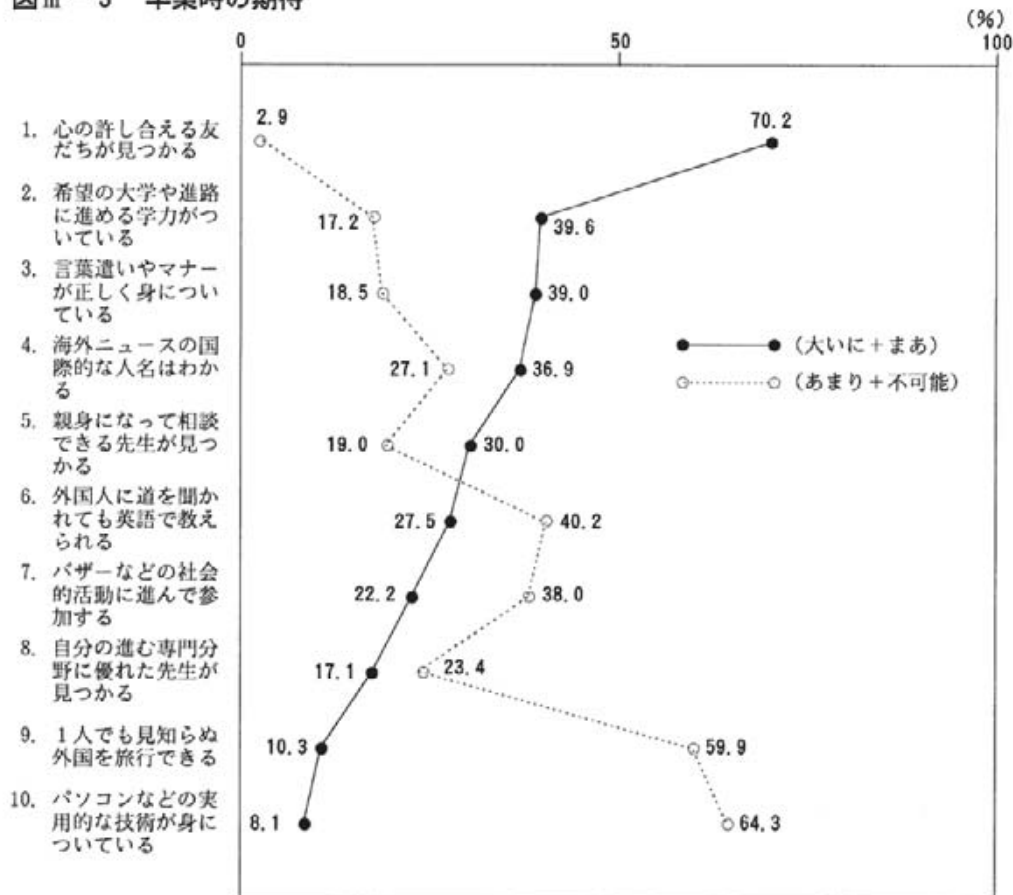
(「知っている」割合)
○は最大値

2. 卒業時の学校期待

図Ⅲ-3は3年間の高校生活を通じ子どもたちがどのように成長してほしいと考えているのか、とりわけ進学校と称される学校に親たちが何を望んでいるかを、「お子さんが今の高校を卒業する頃には、次のようなことはどのくらい可能になると思われるか」という問いで調査したものの単純集計である。「心

の許し合える友だちが見つかる」が70.2%であるほかは、いずれの項目も40%以下の低い期待率となった。逆に「あまり可能でない」と「不可能」を合わせて60%に達した項目に「1人でも見知らぬ外国を旅行できる」と「パソコンなどの実用的な技術が身についている」がある。前者は1人で旅行といういわ

図Ⅲ-3 卒業時の期待



ば生きぬいていく力、タフな精神力が育成されるかを問うたものであり、後者は実用的な技術が身につくかを問うたものである。ともに現在の教科中心、受験中心の高校生活の中では育成しがたい分野といえそうである。

表Ⅲ-2は「心の許し合える友だちが見つかる」と「大学や進路に進める学力がつく」の2項目をそれぞれ属性別に期待率の高い順に整理したものである。心の成長に期待するものと受験学力に期待するものとを対比的にみると、女子生徒、成績中位、母親、高年齢、高学歴の親により心の成長に期待する率が高

いことがわかる。特に高年齢、高学歴の親は受験学力においても他の層より高い期待率を示しており、高校教育に対し多面的な期待をもっていることがうかがえる。

図Ⅲ-4は、卒業時の期待を生徒の成績別にみたものである。「心の友」以外の全ての項目で成績上位者の親の期待率が上回っている。「学力」期待は、とりわけ成績による期待度に差がある。上位者の親が64.7%であるのに対し中位者では31.9%と激減する。本調査は2年生の6月～7月に実施しているから、この時期にすでに親はわが子の成績から将来に

表Ⅲ-2 卒業時の期待

(%)

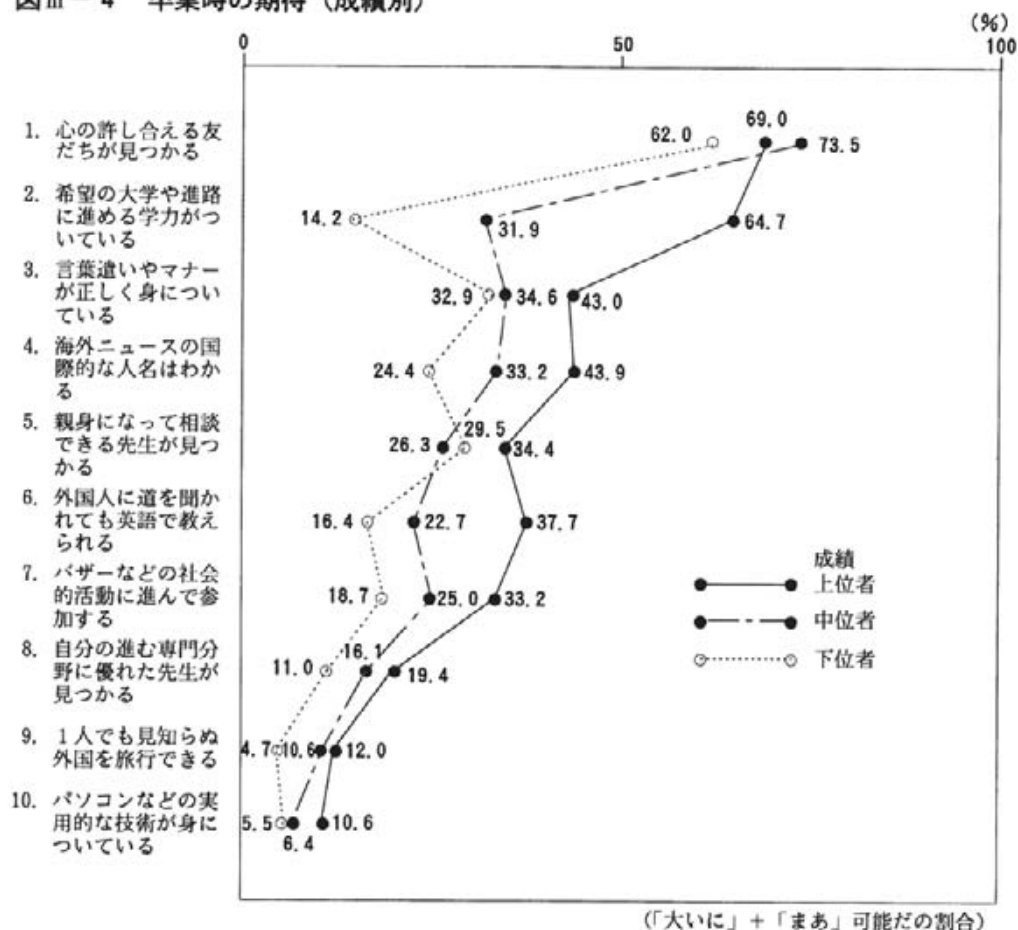
項目	心の許し合える友だちが見つかる					大学や進路に進める学力がつく				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
全体 (大いに+まあ)	70.2					39.6				
生徒の男女別	女子 (73.5)	男子 65.8				男子 (41.0)	女子 38.7			
何番目の子ども	2女以下 (73.7)	長女 73.3	長男 67.1	2男以下 64.7		長男 (41.1)	2男以下 40.9	長女 40.0	2女以下 37.4	
成績別	中位 (73.5)	中の上 72.6	上位 69.0	中の下 67.4	下位 62.0	上位 (64.7)	中の上 51.4	中位 31.9	中の下 25.3	下位 14.2
答えた人 父・母	母親 (70.3)	父親 68.0				父親 (43.0)	母親 39.5			
答えた人の年齢	51～55歳 (76.1)	41～45歳 71.0	36～40歳 70.9	46～50歳 67.6		51～55歳 (45.1)	41～45歳 41.0	46～50歳 38.1	36～40歳 34.1	
父親の学歴	大卒 (72.8)	高卒 71.0	中卒 68.2	短・専卒 64.0		短・専卒 (43.8)	大卒 43.7	高卒 37.3	中卒 35.9	
母親の学歴	大卒 (75.8)	高卒 71.3	短・専卒 68.0	中卒 65.9		大卒 (44.0)	短・専卒 42.9	高卒 38.4	中卒 36.5	

に対する期待をかなり厳しく受け止めているといえる。年齢的には51～55歳のベテラン層は心の許し合える友だちが見つかることと同様、わが子に対する期待を他の年齢層よりももっている点が注目される。

調査対象校が地域のトップ進学校でふだんからも課外補習を実施するなど受験体制がとられていてなお、学力に関する期待率が低いのはなぜだろうか。2年生の6月～7月といえば入学以来、学校の集団の中でのわが子の位置づけがある程度客観的にみえてくる時期

でもあり、将来の進路に向け、そろそろ第一歩を踏み出す時期でもある。それだけに厳しい期待となっているように思われる。一方、「心の許し合える友だちが見つかる」については、すでに経験してきた1年余の学校生活の中で現実に何人かの親しい友人が得られていることのあらわれといえる。このことは、前述されているように極めて学校満足度が高いこととも一致する結果である。すなわち、親たちは進学指導だけに偏らない健全な高校生活を期待しているといえる。

図Ⅲ-4 卒業時の期待（成績別）



3. 親たちの教育観

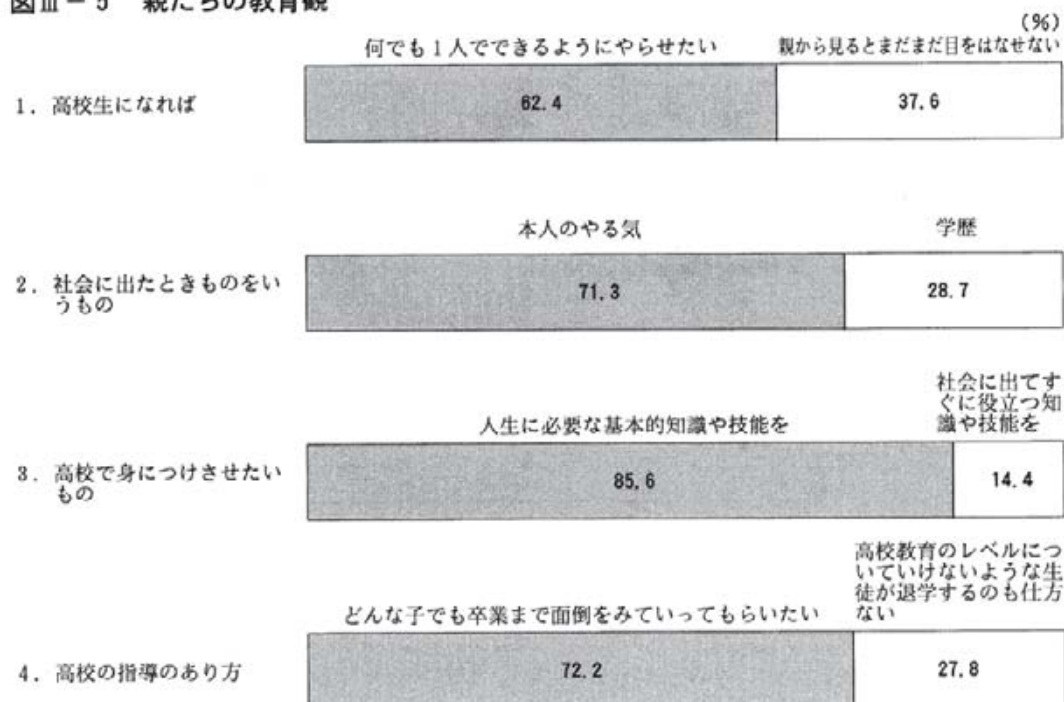
親たちが高校生、社会、高校教育、高校中退問題をどう考えているかをまとめたものが図Ⅲ-5である。62.4%が「高校生ともなれば何でも1人でできるようにやらせたい」と考え、71.3%が「社会は学歴ではなく本人のやる気がものをいう」し、72.2%が「高校はどんな子でも入れた以上卒業まで面倒をみてもらいたい」と考え、85.6%が「高校教育で身につけさせたいのは社会に出ですぐ役に立つ知識や技能ではなく、人生に必要な基本的知識や技能」だと考えている。

自立の問題は『モノグラフ・高校生』vol. 39で『「自立」の遅れがちな高校生』として高校生対象の調査はすでになされている。また、第Ⅱ章の1節においても、「自立型」の親と「庇護型」の親の、子育てのスタイルと

の関連をみている。そこでここでは、親の属性からみてみたい。図Ⅲ-6は親の属性をまとめたものである。父母とも高卒の親が何でも1人でと考えている率が高いこと、前節で注目した51~55歳のベテラン層がまだ目をはなせないとしている点が注目される。表Ⅲ-3では父親の職業でみると、学校関係者がまだ目がはなせないと答えている率が46.8%となる。これは経験的に自立をある程度許容するもののまだまだ目がはなせない、親が手綱を握っておくべきと考えていると思われる。これに対し年齢の若い親の層や自営業の家庭では自立指向が強い。

図Ⅲ-7は社会に出て役立つものは本人のやる気か学歴か、進学校の親がどの程度学歴社会を意識しているかを属性別にまとめたも

図Ⅲ-5 親たちの教育観

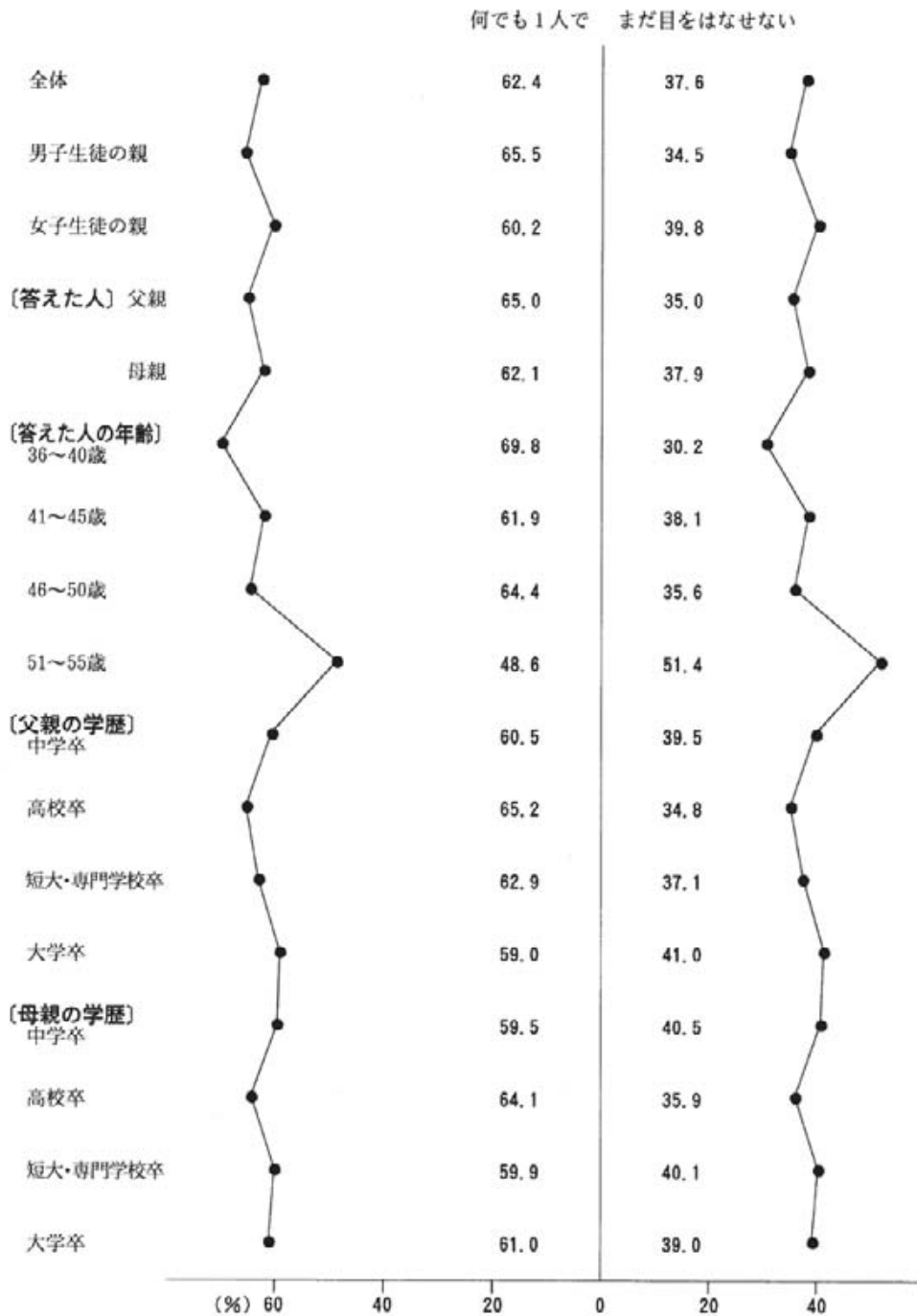


のである。全体で28.7%が学歴の大切さを答えているが、属性別で目立つのは年齢51～55歳のベテラン層の33.3%と、父母ともに高卒の親にやや高い学歴指向が見受けられる点が

注目される。

図Ⅲ－8は高校中退の問題を親がどう考えているかをまとめたものである。学校満足度の高い進学校では高校中退者の数は實際上少

図Ⅲ－6 親たちの教育観（高校生になれば）



ないから、親たちの意識も一般的であるといえる。その中で父親の38.9%、大卒の母親の35.4%が中退やむなしの意識でいることは、こうした層の親たちが、高校教育を準義務化して捉えるのではなく、ある程度の内実を伴ってこそその高校教育と考えているように思われる。表Ⅲ-3によれば、子どもの成績別に検討すると成績上位、中の上位者層の約32%が退学をやむなしとするのに対し、中位者層以下で卒業まで面倒をみてほしいという答えが70%を超しているのは、親たちの意識がわが子の成績を通し現実的に形成されているためと考えられる。

高校進学率が急上昇したにもかかわらず高校側が生徒の多様化に追いついていけず、現実社会の価値観と乖離しているといわれる。今回の進学校の親たちの学校期待の調査にも、学校への認識度や進路に対する学力達成の期待度などに関して、そうした多様化の傾向があらわれている。すなわち進学校として特色づけられる学校においても、親たちの学校期待は多様なものであると言える。したがって高校を取り巻く状況が大きく変化している今日、学校と生徒・親と現実社会の多様な価値観との整合性を図る努力を、それぞれの学校の生徒の実態に即して試みる必要がある。

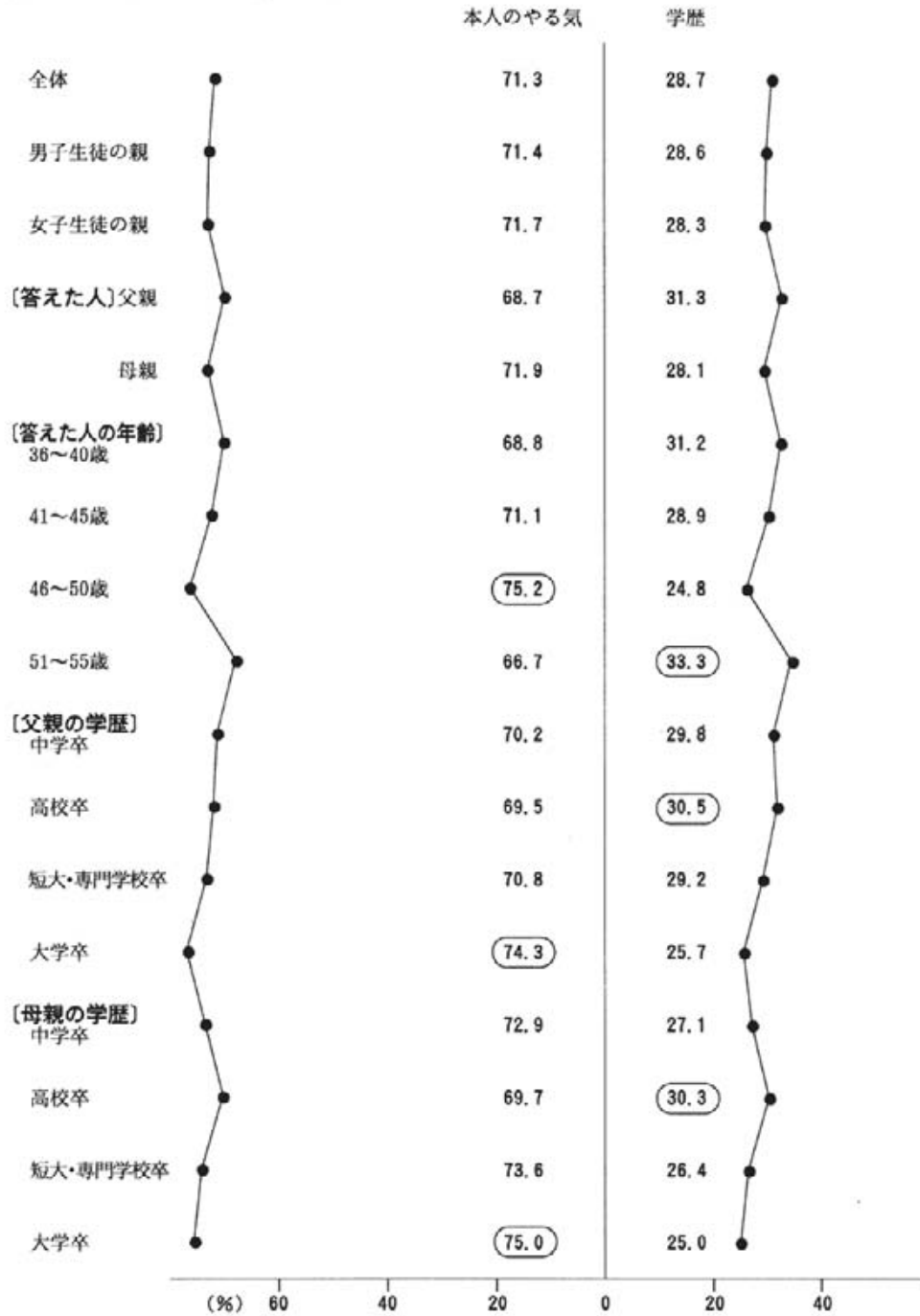
表Ⅲ-3 親たちの教育観

(%)

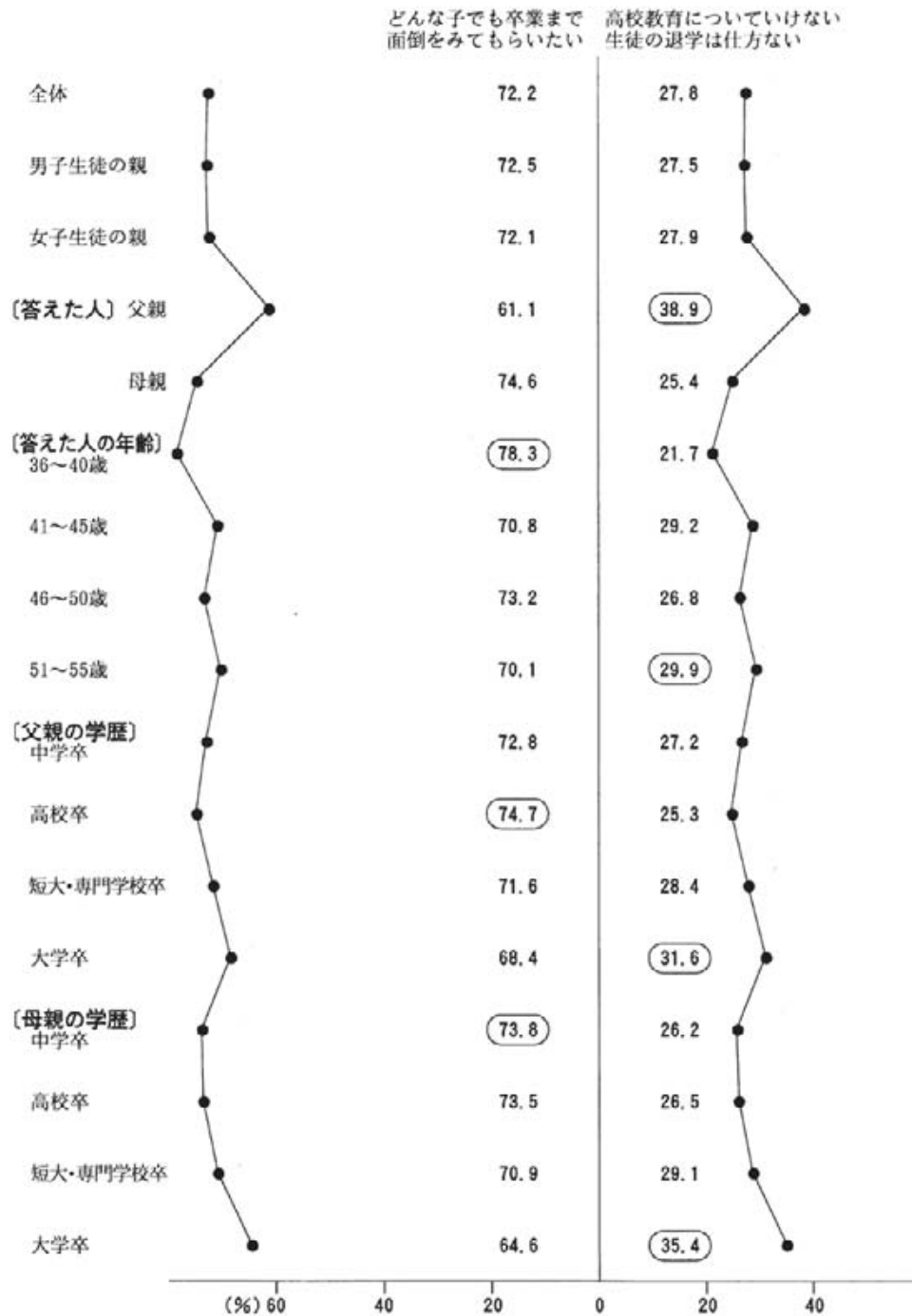
		何でも1人	まだ目にはなせない	本人のやる気	学歴	高校では基本を	役に立つことを	どんな子も卒業を	退学は仕方なし
成 績	上位者の親	64.6	35.4	68.5	31.5	83.3	16.7	68.0	32.0
	中の上	62.2	37.8	73.8	26.2	87.1	12.9	68.1	31.9
	中位	60.5	39.5	72.8	27.2	87.0	13.0	76.0	24.0
	中の下	63.8	36.2	68.6	31.4	84.1	15.9	73.1	26.9
	下位	60.3	39.7	69.4	30.6	83.2	16.8	75.6	24.4
父 親 の 職 業	自営業	65.3	34.7	73.1	26.9	86.7	13.3	72.7	27.3
	公務員	64.1	35.9	63.5	36.5	87.8	12.2	67.8	32.2
	会社員	62.0	38.0	72.4	27.6	84.6	15.4	73.1	26.9
	学校関係	53.2	46.8	75.9	24.1	89.7	10.3	69.2	30.8

○は最大値

図Ⅲ-7 親たちの教育観（社会に出て役立つもの）



図Ⅲ-8 親たちの教育観（高校は入学してきた生徒を）



第Ⅳ章 学校の教育指導への期待



1. 子どもを伸ばす効果的方策

教育が制度と組織を必要とすることはいうまでもないが、現に存在する諸々のものがベストとは言い切れないし、地域や親の意識、生徒の基本的な素質などにより学校のあり方は多種多様をきわめることになる。生徒の進学希望が急激に増加した中で、高校のあり方が変質を余儀なくされている。それでもなお教育行政や学校の内部には変革を遂げることができず過去の残滓を引きずっている面も多くある。

そのような状況の中で、親たちは自分の子どもがどのような教育を受けたら本当に伸びることができると考えているのであろうか。父母はどのような指導方法が子どもの伸長に

資すると考えているかを考察してみた。

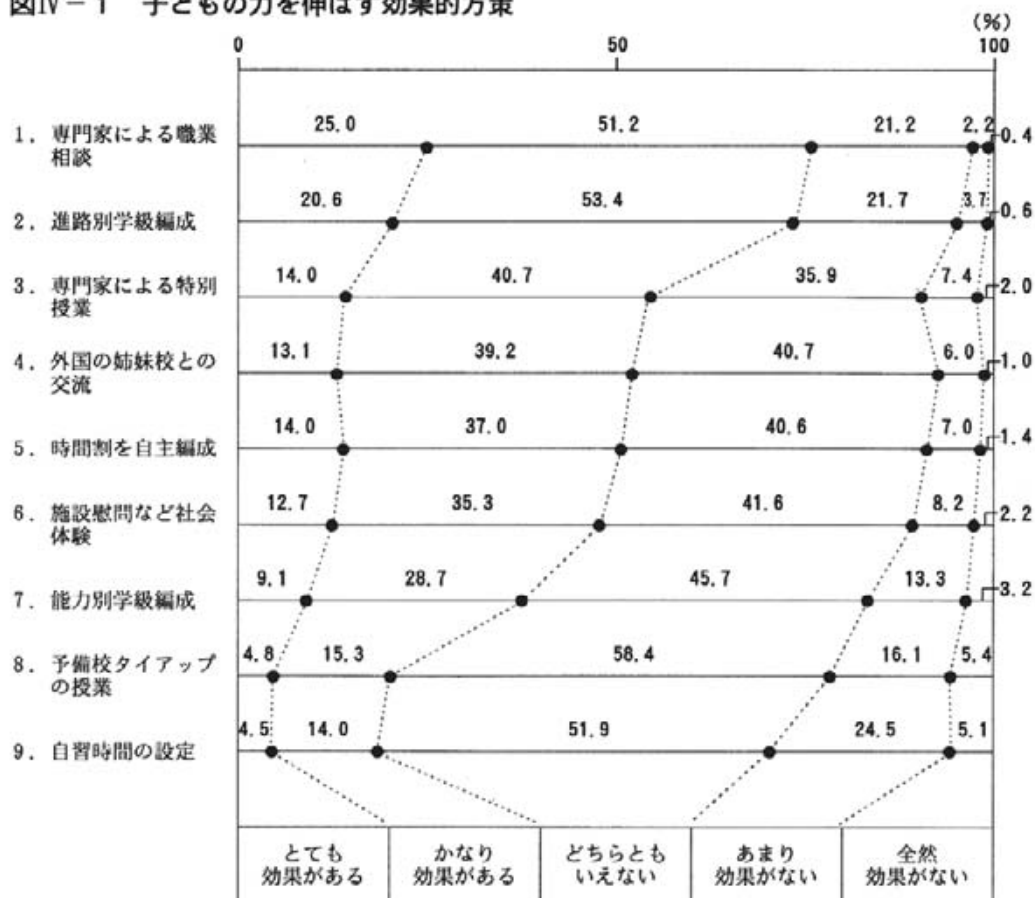
図Ⅳ-1は、それらの方策の効果聞いたものであるが、「とても効果がある」ものとして最も認めているのは「専門家による職業相談」で、効果を認めているものは約76%ある。次が「進路別学級の編成」で効果を認めるものは約74%。「専門家を招いて授業をしてもらう」が合計で約55%で、その道の専門家の教育力に期待するものが上位にきている。「外国の姉妹校との交流」「時間割の自主編成」までが「効果あり」とするものが50%を超えており、最近よく話題に上るボランティア活動としての「施設慰問などの体験学習」は50%弱で、まだ教育上の効果が十分認めら

れてはいない。「能力別学級の編成」や「予備校とのタイアップの授業」は、現在の受験体制に対応する1つの方策であるが、近年の過熱気味と思えるほどの進学志向の中で、まだ地方の進学校の親たちは、教育上の効果をあまり認めたくないようである。「自習時間を設定」して自主的な学習をさせることは20

%弱しか効果を認められていない。地域の中で優れた子どもをもつ親でありながら、子どもが十分意欲をもって自習できるかどうかに対して不安をもっているようである。

では、親の学歴、職業、子どもの成績、親の学校満足度から、どのような差が出てくるかをみてみよう。

図IV-1 子どもの力を伸ばす効果的方策



(1) 親の学歴からみた差異

表Ⅳ-1は、親の学歴によるそれらの方策に対する態度の相違をみたものである。高学歴の親により受け入れられるものと、学歴にあまり関係ないものがある。「外国の姉妹校との交流」「時間割の自主編成」「施設慰問などの社会体験」「自習時間の設定」などが特に高学歴の親に受け入れられるものである。高学歴の親たちは、自分の子どもの能力を信じ体験的に受験のノウハウを知っており、受験指導はむろんのこととして、さらに子どもたちに自由でのびのびとした生活をさせ、より個性を伸ばす教育を学校に期待しているようだ。特に高学歴の母親は、大多数の方策を効果ありと認めている割合が学歴の低い母親より高いのだが、中卒の父母がともに「能力別学級の編成」を高い割合で望んでいるのは、自分の実現できなかった進学を子どもにぜひ

実現させたく、きちんとした大学受験の指導をしてもらう最もよい方法と考えているからであろう。

では、個別の項目にもう少し注目してみたい。「専門家による職業相談」は、父親の学歴にかかわらず、どの層も高い効果を認めている。そして大卒の父母を除いて、それぞれの学歴で各項目中、最も高く評価している。

2番目に効果的と考えられている「進路別学級の編成」は、父親の学歴による差はあまりないが、母親のほうは明らかに高学歴になるほど効果を認める割合が高くなり、大卒の母親は80%以上が生徒の進路にしたがって学級を編成することが望ましいと考えている。

「専門家を特別授業に招く」ことを効果的とするものは平均50%を超えているが、中卒の母親だけは50%を切っており、高学歴の母親のほうの方がより効果を認めている。

また、近年とみに国際化が叫ばれている中

表Ⅳ-1 子どもの力を伸ばす効果的方策 × 学歴

	全体	父親の学歴				母親の学歴			
		中卒	高卒	短・専卒	大卒	中卒	高卒	短・専卒	大卒
		1. 専門家による職業相談	76.2	76.4	75.6	83.0	74.7	70.3	76.9
2. 進路別学級編成	74.0	72.9	75.2	75.2	74.9	70.2	< 73.8	< 76.3	< 80.2
3. 専門家による特別授業	54.7	54.1	55.1	58.4	54.0	47.6	< 52.3	< 59.8	< 60.0
4. 外国の姉妹校との交流	52.3	46.1	50.8	62.5	52.4	45.3	49.9	59.4	52.0
5. 時間割を自主編成	51.0	41.3	< 47.4	< 52.8	< 58.4	44.6	< 48.4	< 51.8	< 69.3
6. 施設慰問など社会体験	48.0	42.2	45.0	61.7	51.5	45.2	46.6	51.9	51.5
7. 能力別学級編成	37.8	40.7	36.8	40.1	39.4	39.3	37.0	39.7	39.6
8. 予備校タイアップの授業	20.1	17.2	19.3	28.1	18.8	15.9	19.5	22.6	15.1
9. 自習時間の設定	18.5	18.1	15.5	21.4	22.6	15.6	< 16.7	< 19.7	< 25.7

(「とても」+「かなり」効果がある割合)
○は最大値 ~~~は最小値

で、「外国に姉妹校をつくり、交流を行う」ことは高校レベルではまだまだそう多くはない。それでも父親も母親も比較的高学歴の家庭が、ある程度の願望を含めて期待することが多いようである。

大学のように自分の興味関心、必要に応じて授業の科目を選択していく「時間割の自主編成」は、大卒父親58.4%、母親69.3%と大学教育を受けて実際に経験した親たちにはかなり効果あるものと捉えられている。

「施設慰問などの社会体験」をさせるボランティア活動など社会体験の有用性には一応の支持があるが、中卒父親42.2%、母親45.2%、大卒父親、母親がともに51.5%と、父母の学歴による差がかなりはっきり出ている。

「能力別学級の編成」は、僅差であるが、高卒の父母が最も低い数字である。おそらくは自分自身がそのようなことに会って嫌な思いをした経験に基づくのかもしれない。

今や通信衛星を使って全国で同じ授業を受けることができる時代であるが、「予備校とタイアップする授業」にはあまり期待していない。裏を返せば学校への期待のほうが高いということで、まだまだ学校への依存（信頼）が、特に地方では高いとみてもいいかと思う。大卒の親は、何もそこまでなくてもという感じで低く、中卒の親にとっては、授業は先生がするものであって、自分の経験の外にあることに戸惑いがある低いのではなかろうか。

「自習時間を設定すること」は、子どもが果たして有効に時間を過ごせるだろうかという不安と、やはり授業は先生にしてもらうことが最もよいと考える教師への依存の高さなどからか、親たちにはあまり評判はよくない。ただ、父母ともに学歴の高い層は子どもの自主性に賭けているようである。

(2) 親の職業、仕事からみた差異

表Ⅳ-2をみると、「専門家による職業相談」は、父母ともに自営業者が最も高く評価しており、学校関係者は平均を10%下回る効

果しか認めていない。

「進路別に学級を編成」することに学校関係者の家庭は他の職業の家庭に比べ、効果を認める割合が低くなっている。実際にはかなり多く行われている進路別学級に学校関係者があまり期待していないのは、現代の高校生が抱く無力感と差別感を醸成するシステムになる恐れがあることに気づいているからではなかろうか。

外国へ行ったり、外国から招いたりすることによってグローバルなもの見方や考え方ができるようになることは等しく認めるところである。「外国の姉妹校との交流」による効果を認めるのは、経済的に割合余裕のある自営業者が57.1%と特に高く、専業主婦も働く母親より効果を認めているのは家庭に経済的な余力があるからであろう。

「時間割を自主的に編成」できるかどうかは、子どもの意識がどこまで確立されているかにかかっている。父親の職業では、学校関係者が60.8%で、ふだんの実践の中で本当に自分の望むものを選択できるシステムをつくりたいと思っている気持ちがあらわれているのだと思う。

「ボランティア活動など社会体験」をさせることに対しては、母親にはその従事する仕事からみた差異がないが、父親のほうでは学校関係者が低く、学校関係者の疑問視が意外であった。

「能力別に学級を編成」することは、授業の効率面からだけいえば確かによい方法である。父親が学校関係者の家庭では30.4%と最もその効果を認めていない。生徒がそのようなシステムの中におかれた場合の心理状態がよくわかる立場にあり、どういう結果が出るかある程度経験的に予測できるからであろう。

「予備校とのタイアップの授業」に対する拒否反応は、やはり学校関係者に強く、トータルな意味での教育にかかわらない予備校に対して自分たちが行っているのはただ学力の向上だけを目標にしているのではないという自負があるからであろう。その一方で子ども

を予備校や塾に熱心に通わせている親に学校関係者が多いともいわれている。

「自習時間の設定」に対しては、父親が学校関係者、フルタイムで働く母親が20%を超えて効果ありと考えており、子どもの自主性の発展にかけたいという気持ちがわずかにのぞいている。

(3) 子どもの成績からみた差異

子どもの成績から、それぞれの方策に対する効果の期待度をみたものが表Ⅳ-3である。

全体に「中の上」の成績の子どもをもつ親がいずれの方策に対しても積極的な期待を示している。注目するのは「専門家による特別授業」で、専門家との接触による子どもの啓発に期待をかけているのは成績面ではトップ層ではない子の親たちである。成績上位の子どもの親は、専門家のイメージが自分の描くものと異なるのか、効果を認めるものが50%

に達していない。それに比べると、「能力別学級の編成」については成績上位者の親たちは49.2%と、断然その効果を期待している。そして、「予備校とのタイアップの授業」は望まず、自校の先生たちに期待するところが大きい。むしろ成績下位の子をもつ親が、自校の先生の指導方法に限界を感じるのか、予備校に24.0%と最も期待している。

(4) 親の満足度による差異

親の学校満足度からみると(表Ⅳ-4)、現在子どもの通学している学校に「あまり満足していない」層の親たちが、積極的に学校が様々な方策をとることに期待をかけている。何とか現状を打破したいという気持ちがあらわれているのではなかろうか。その一方、学校への満足層の親には、当然ながら、現状維持的な姿勢が強いようである。

表Ⅳ-2 子どもの力を伸ばす効果的方策 × 職業

(%)

	全体	父親の職業				母親の仕事			
		自営業	公務員	会社員	学校関係	フルタイム	パートタイム	専業主婦	自営業
1. 専門家による職業相談	76.2	78.9	73.3	77.4	65.8	72.2	76.6	72.9	83.5
2. 進路別学級編成	74.0	71.8	77.7	75.1	68.4	72.8	78.2	73.5	75.8
3. 専門家による特別授業	54.7	54.9	49.3	56.4	51.9	53.8	55.3	54.3	54.5
4. 外国の姉妹校との交流	52.3	57.1	50.3	51.2	51.9	49.7	51.1	52.6	51.8
5. 時間割を自主編成	51.0	54.5	55.1	47.5	60.8	46.0	54.3	49.8	56.1
6. 施設慰問など社会体験	48.0	52.5	44.3	48.5	41.7	47.2	47.5	47.4	49.7
7. 能力別学級編成	37.8	38.1	40.8	37.4	30.4	33.6	42.2	38.7	39.1
8. 予備校タイアップの授業	20.1	19.0	25.5	20.1	16.4	19.2	19.7	22.7	19.4
9. 自習時間の設定	18.5	18.8	18.3	17.4	22.8	20.5	15.8	19.8	17.1

(「とても」+「かなり」効果がある割合)
○は最大値

表Ⅳ－３ 子どもの力を伸ばす効果的方策 × 成績

(%)

	学 業 成 績				
	上位	中の上	中位	中の下	下位
1. 専門家による職業相談	69.3	79.9	78.2	77.8	74.2
2. 進路別学級編成	72.7	78.1	74.8	70.9	71.1
3. 専門家による特別授業	49.5	54.9	55.8	58.9	55.5
4. 外国の姉妹校との交流	50.4	56.4	51.1	53.4	49.3
5. 時間割を自主編成	43.6	56.5	51.1	52.9	48.4
6. 施設慰問など社会体験	39.3	54.8	45.8	50.5	49.2
7. 能力別学級編成	49.2	41.9	33.7	31.5	30.7
8. 予備校タイアップの授業	18.9	18.7	19.2	22.9	24.0
9. 自習時間の設定	17.9	19.4	15.8	19.9	21.7

(「とても」+「かなり」効果がある割合)
○は最大値

表Ⅳ－４ 子どもの力を伸ばす効果的方策 × 親の学校満足度

(%)

	親の学校満足度				
	とても満足	かなり満足	どちらとも いえない	あまり 満足していない	全然 満足していない
1. 専門家による職業相談	73.1	77.0	77.2	83.6	62.5
2. 進路別学級編成	74.0	74.5	75.5	71.0	75.0
3. 専門家による特別授業	55.8	54.1	54.7	64.5	0.0
4. 外国の姉妹校との交流	55.3	51.5	48.3	59.0	50.0
5. 時間割を自主編成	50.5	49.7	53.0	61.3	62.5
6. 施設慰問など社会体験	45.3	47.4	51.5	58.1	0.0
7. 能力別学級編成	39.8	36.5	36.8	43.5	37.5
8. 予備校タイアップの授業	21.8	16.6	24.9	29.0	0.0
9. 自習時間の設定	20.7	17.4	19.0	17.8	12.5

(「とても」+「かなり」効果がある割合)
○は最大値

2. 親の期待する教育指導

日常の教育の中で行われていること、行ったらよいのではないかと考えられるものにどの程度の必要性を感じ期待しているかをみたものが、図IV-2である。

調査対象として大都市以外の高校が多かったせいか、「夏休みの講習」を必要とする数字は70%を超えた。最近でこそ地方にも予備校が多数できて、夏の講習等を容易に受けられるようになったとはいえ、ふだんの生徒をよく知っている自校の先生への期待は当然高いといってもよいだろう。しかし、大都市圏の生徒にとっては、暑い夏は冷房の効いている予備校のほうが快適であり、また平常の厳しい目から逃れられる予備校のほうが人気が高いようである。都会の学校はまず施設において魅力を失い、生活指導に無縁であり、先生の先入観がない、受験指導専門の予備校のほうが生徒にとっては評判がよい。

「放課後の補習」を51.5%が望んでいるのも、学校への期待が大きいことを物語っている。子どもが自力で学ぶことへの親の不安のあらわれと思える。

学校と家庭との連携については、「通知表に必ず先生の所見を書く」約69%、「学年順位を教える」約67%と、いずれも必要性を認めるのが3分の2あり、「家庭への定期連絡物」を希望しているものも50%を超えていることからみても、学校情報への期待の高さがみられる。その一方で、「父親懇談会」21.6%、「保護者面談」13.9%と低くなっている。これは学校からの一方的な情報を要求する姿勢であり、先生と直接会い、自分の目で確かめようとする自発的な積極性が欠けているのではなかろうか。高校段階では、現代の学校、

受験のシステムも学習内容もわからないとあって、学校お任せ的な態度になってしまう傾向が強いようである。

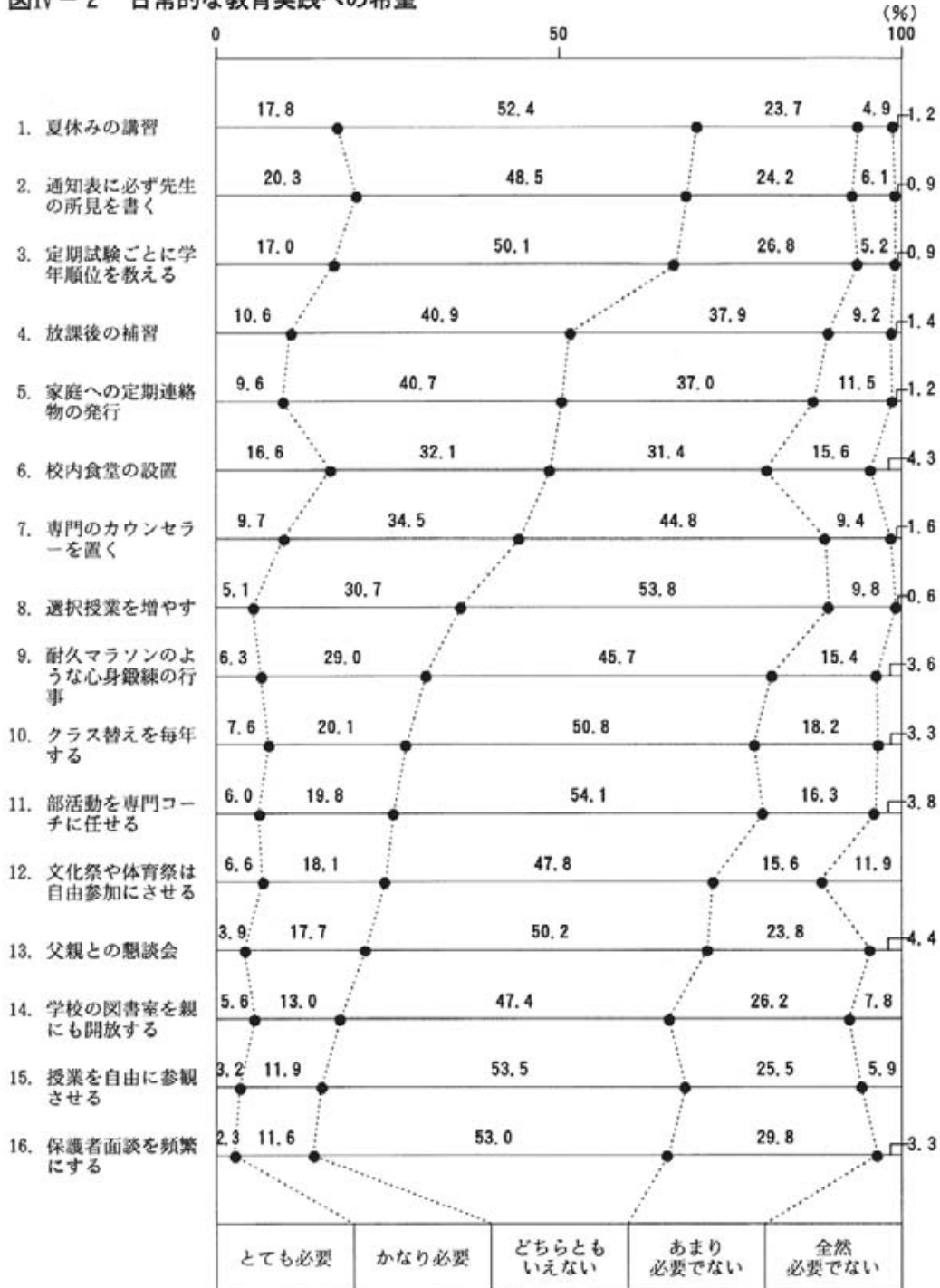
(1) 学歴と職業からみた差異

表IV-5は、日常的な教育実践への期待を学歴からみたものである。

中卒の父親が高いのは「耐久マラソンのような心身鍛練行事」「クラス替え」であるのに対して、中卒の母親は「父親懇談会」「保護者面談」を望んでいる割合が他の学歴に比べて多くなっている。高卒の父親は、「学年順位を教える」「放課後の補習」など、より日常の学習生活にからんでくるものに対する希望が多くなっている。それに対し高卒の母親は、「夏休みの講習」「通知表に所見を書く」など、よりきめの細かい進学に結びつく指導を望んでいる。短大・専門学校卒は何に対しても積極的な要求を出す傾向にあるようである。家庭とのコンタクトを望んでいるのは短大・専門学校卒が多いようである。大卒になると、「食堂の設置」「選択授業を増やす」「授業の自由参観」など、どちらかという子どもがのびのびと生活できる環境づくりを希望している。

表IV-6は、親の職業からみた期待である。総じて父母ともに自営業者が高い数字を示している。公務員層の父親が、「通知表への所見」「放課後の補習」「体育祭・文化祭の自由参加」「父親懇談会」などの項目に比較的高い割合を示しており、教育熱心さと勉強に関心の強い家庭の雰囲気であらわれている。母親ではパートタイム層に、勉強中心の項目に対する反応がやや集まっている。

図IV-2 日常的な教育実践への希望



表IV-5 日常的な教育実践への希望 × 学歴

(%)

	父親の学歴				母親の学歴			
	中卒	高卒	短・専卒	大卒	中卒	高卒	短・専卒	大卒
1. 夏休みの講習	71.1	71.8	72.8	68.0	61.9	72.1	69.9	65.0
2. 通知表に必ず先生の所見を書く	68.5	67.4	78.7	70.9	59.1	70.7	69.2	58.0
3. 定期試験ごとに学年順位を教える	67.7	68.6	68.1	64.9	63.9	68.2	65.6	67.0
4. 放課後の補習	52.4	53.8	50.0	46.8	52.4	52.7	49.0	44.0
5. 家庭への定期連絡物の発行	47.7	48.0	61.8	54.0	42.9	40.3	53.7	50.5
6. 校内食堂の設置	40.9	48.2	46.1	52.0	49.4	47.0	48.0	58.0
7. 専門のカウンセラーを置く	37.8	43.6	47.2	46.5	42.8	41.1	48.5	54.0
8. 選択授業を増やす	30.7	33.1	37.5	40.0	35.7	33.1	36.9	44.0
9. 耐久マラソンのような心身鍛錬の行事	40.2	35.5	39.4	33.6	34.5	36.0	36.6	33.0
10. クラス替えを毎年する	31.5	27.8	19.1	28.6	32.1	27.3	28.7	30.1
11. 部活動を専門コーチに任せる	22.3	24.6	28.4	27.3	27.7	24.3	28.1	27.0
12. 文化祭や体育祭は自由参加にさせる	25.2	23.6	21.4	25.2	28.5	23.1	24.4	28.0
13. 父親との懇談会	20.4	23.3	25.8	18.9	25.0	21.5	20.7	19.0
14. 学校の図書室を親にも開放する	16.5	15.2	24.7	20.6	21.7	16.5	18.5	22.0
15. 授業を自由に参観させる	11.8	12.8	15.8	18.1	15.5	12.4	15.2	30.0
16. 保護者面談を頻繁にする	15.8	16.5	12.3	10.9	19.1	13.6	12.8	16.0

(「とても」+「かなり」必要の割合)
○は最大値 ~は最小値

表IV-6 日常的な教育実践への希望 × 職業

(%)

	父親の職業				母親の仕事			
	自営業	公務員	会社員	学校関係	フルタイム	パートタイム	専業主婦	自営業
1. 夏休みの講習	70.3	69.0	71.2	70.1	71.3	72.5	68.7	68.5
2. 通知表に必ず先生の所見を書く	68.7	78.5	67.8	58.8	69.2	70.6	63.6	75.0
3. 定期試験ごとに学年順位を教える	73.0	62.7	65.4	66.3	66.2	66.7	64.3	74.3
4. 放課後の補習	50.6	53.8	52.0	47.6	51.0	57.8	49.4	45.6
5. 家庭への定期連絡物の発行	49.4	54.1	50.5	56.3	46.6	53.7	50.8	49.6
6. 校内食堂の設置	54.3	48.1	47.3	43.8	45.5	53.1	44.4	51.3
7. 専門のカウンセラーを置く	48.0	45.2	41.9	55.1	48.0	43.8	37.4	49.0
8. 選択授業を増やす	43.3	36.9	32.7	41.3	32.5	35.3	35.7	41.7
9. 耐久マラソンのような心身鍛錬の行事	39.6	36.1	33.6	35.0	37.4	36.8	28.5	41.7
10. クラス替えを毎年する	33.0	24.8	26.5	18.8	31.2	24.8	27.1	27.6
11. 部活動を専門コーチに任せる	30.9	19.2	24.5	21.3	29.2	21.3	21.2	35.3
12. 文化祭や体育祭は自由参加にさせる	26.9	30.1	23.7	13.8	26.1	23.7	21.3	28.8
13. 父親との懇談会	24.0	26.6	21.2	17.6	21.8	23.3	20.0	22.6
14. 学校の図書室を親にも開放する	16.8	19.1	17.7	23.8	17.3	22.9	17.7	16.0
15. 授業を自由に参観させる	15.9	12.7	13.1	23.8	16.7	13.8	14.2	16.6
16. 保護者面談を頻繁にする	17.9	13.3	13.6	8.8	14.6	14.6	12.6	18.6

(「とても」+「かなり」必要の割合)
 ○は最大値 ~~~は最小値

(2) 子どもの成績と親の
学校満足度からみた差異

表Ⅳ－7は子どもの成績からみた期待である。成績上位の子をもつ親は必要と考えるものが相対的に少なく、「夏休みの講習」や「放課後の補習」の必要性を感じているものは成績下位のものよりかなり少ない。「通知表に所見を書く」「学年順位を知らせる」「定期的

的に家庭への連絡を出す」といった学校と家庭の連携、学校の情報を望んでいる。一方成績下位のほうは補習や講習に力を入れることを最も望んでおり、家庭へいろいろ知らせることより学力を何とかつけてほしいという態度がみられる。そうした点から、「保護者面談」を望む割合も高い。下位の生徒と並んで中の上の生徒の家庭は、いずれのことにも必要性を感じている割合が高い。

表Ⅳ－7 日常的な教育実践への希望 × 成績

	学 業 成 績				
	上位	中の上	中位	中の下	下位
1. 夏休みの講習	62.6	71.4	67.1	75.8	79.7
2. 通知表に必ず先生の所見を書く	68.9	71.4	68.7	67.8	66.7
3. 定期試験ごとに学年順位を教える	70.6	71.3	71.3	71.5	60.6
4. 放課後の補習	42.2	52.1	47.0	58.4	67.4
5. 家庭への定期連絡物の発行	50.2	52.7	48.8	49.8	48.8
6. 校内食堂の設置	44.2	50.6	51.5	41.5	52.0
7. 専門のカウンセラーを置く	42.5	47.5	42.7	43.9	44.1
8. 選択授業を増やす	36.0	35.2	35.3	39.5	34.6
9. 耐久マラソンのような心身鍛錬の行事	28.1	39.9	32.3	42.0	36.8
10. クラス替えを毎年する	28.3	26.9	25.4	29.1	35.9
11. 部活動を専門コーチに任せる	22.4	27.9	32.3	29.4	28.6
12. 文化祭や体育祭は自由参加にさせる	22.3	24.0	23.6	23.2	34.9
13. 父親との懇談会	20.6	24.3	19.6	21.2	23.8
14. 学校の図書室を親にも開放する	17.3	22.4	17.0	17.2	18.6
15. 授業を自由に参観させる	14.6	20.0	12.8	13.0	14.8
16. 保護者面談を頻繁にする	14.2	13.3	13.6	12.5	18.8

(「とても」+「かなり」必要の割合)
○は最大値 〰は最小値

では、親の学校満足度からみたらどうなるか示したのが表Ⅳ－８である。学校に対して「あまり満足していない」層が、やはりどの面でも希望が強い傾向にあることがうかがわれる。「かなり満足している」層と「どちら

ともいえない」層は積極的な必要性を示さないが、「文化祭の自由参加」や「選択授業の増加」といった生徒の勝手な行動を助長する心配のあるものには消極的である。

表Ⅳ－８ 日常的な教育実践への希望 × 親の学校満足度

(%)

	親の学校満足度				
	とても満足	かなり満足	どちらとも いえない	あまり満足 していない	全然満足 していない
1. 夏休みの講習	74.3	71.2	66.2	60.3	62.5
2. 通知表に必ず先生の 所見を書く	74.9	67.5	66.8	69.9	62.5
3. 定期試験ごとに学年 順位を教える	76.4	65.2	64.6	61.3	50.0
4. 放課後の補習	51.8	52.1	49.1	52.4	75.0
5. 家庭への定期連絡物の 発行	54.1	48.5	51.3	43.2	37.5
6. 校内食堂の設置	52.6	47.9	45.7	49.2	37.5
7. 専門のカウンセラー を置く	42.8	43.2	43.7	60.3	37.5
8. 選択授業を増やす	34.1	36.1	32.8	49.2	37.5
9. 耐久マラソンのよう な心身鍛錬の行事	34.8	36.8	31.0	44.5	0.0
10. クラス替えを毎年す る	32.6	26.8	23.3	38.1	12.5
11. 部活動を専門コー チに任せる	26.5	23.3	30.6	30.7	12.5
12. 文化祭や体育祭は自 由参加にさせる	28.2	23.3	21.0	31.7	25.0
13. 父親との懇談会	25.2	19.3	23.1	23.8	12.5
14. 学校の図書室を親に も開放する	20.1	18.1	17.2	20.6	12.5
15. 授業を自由に参観さ せる	15.6	13.8	14.2	23.8	25.0
16. 保護者面談を頻繁に する	16.7	12.7	13.3	17.5	12.5

(「とても」＋「かなり」必要の割合)
○は最大値 〰は最小値

3. 親子の入学希望度と学校満足度

親子の入学希望度が80%を超える高い割合を示していたことは、すでに調査対象の特性として第1章で指摘されている。ここでは、そうした親子の入学希望度と現在の学校満足度の落差と属性の関係をみてみたい。以下の図の表示は線の長さが落差の大きさを示している。

(1) 親の学歴からみると (図IV-3)

高卒の父母をもつ子どもが最も入りたかったようであるが、親としては高校に行っていない中卒の父母が最も入ってほしかったようで、高学歴になるにつれて順次親の希望度は下がっている。では満足度はというと、大卒の両親をもつ子どもが最も高くなっており、親のほうでは高卒が最も満足している。希望と満足の落差は父親の学歴の違いでは3~5%であるが、母親のほうでは学歴による差が2~20%と開き、特に中卒の母親からみた子どもの満足度は極端に下落が激しい。高校に対する憧れが美化されていて、実際に入学した高校がいかに大変なところであるか戸惑っているのかもしれない。それがまた不満となってあらわれてきているのだろう。母親のほうも他の学歴と比べて最も望んでいたにもかかわらず、現在の学校満足度では約20ポイントも下がってしまい、親子ともに最も落差が大きくなっている。大卒母親の子どものみが希望度より満足度に増加がみられるのは、学校の教育内容に十分手ごたえがあったのであろうか。

(2) 親の職業、仕事からみると

(図IV-4)

落差の大きい職業層は、父親では学校関係

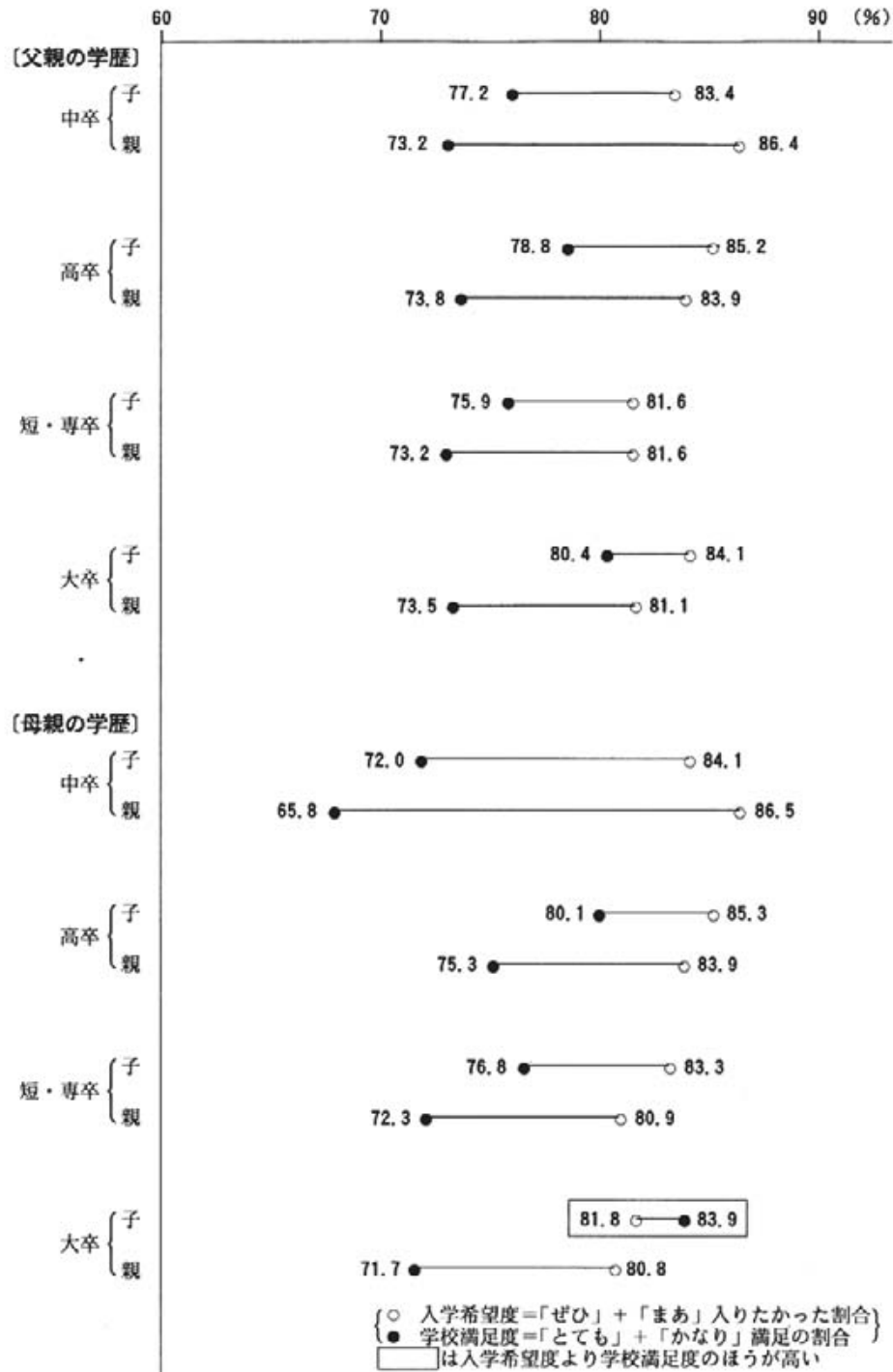
(16.4%)、次に公務員層(13.2%)が、母親ではフルタイム層(11.8%)である。親子間の希望度の差は父親が公務員の親子、パートタイムの母子に約3~4%の差があるだけで、全体的に少ない。しかし、親子間の満足度の差になると学校関係者で10%、専業主婦、フルタイムの母親で7%と親子の間でも相当ずれが生じている。ずれの大きさは、一面では学校にかけた期待のずれであり、他面では子どもに対し、親のほうは大学進学を目指して相当な学習を期待したにもかかわらず、子どもはそれほどがむしゃらにやらない、そのあたりに親の満足が十分でない理由があるのかもしれない。

(3) 子どもの成績からみると (図IV-5)

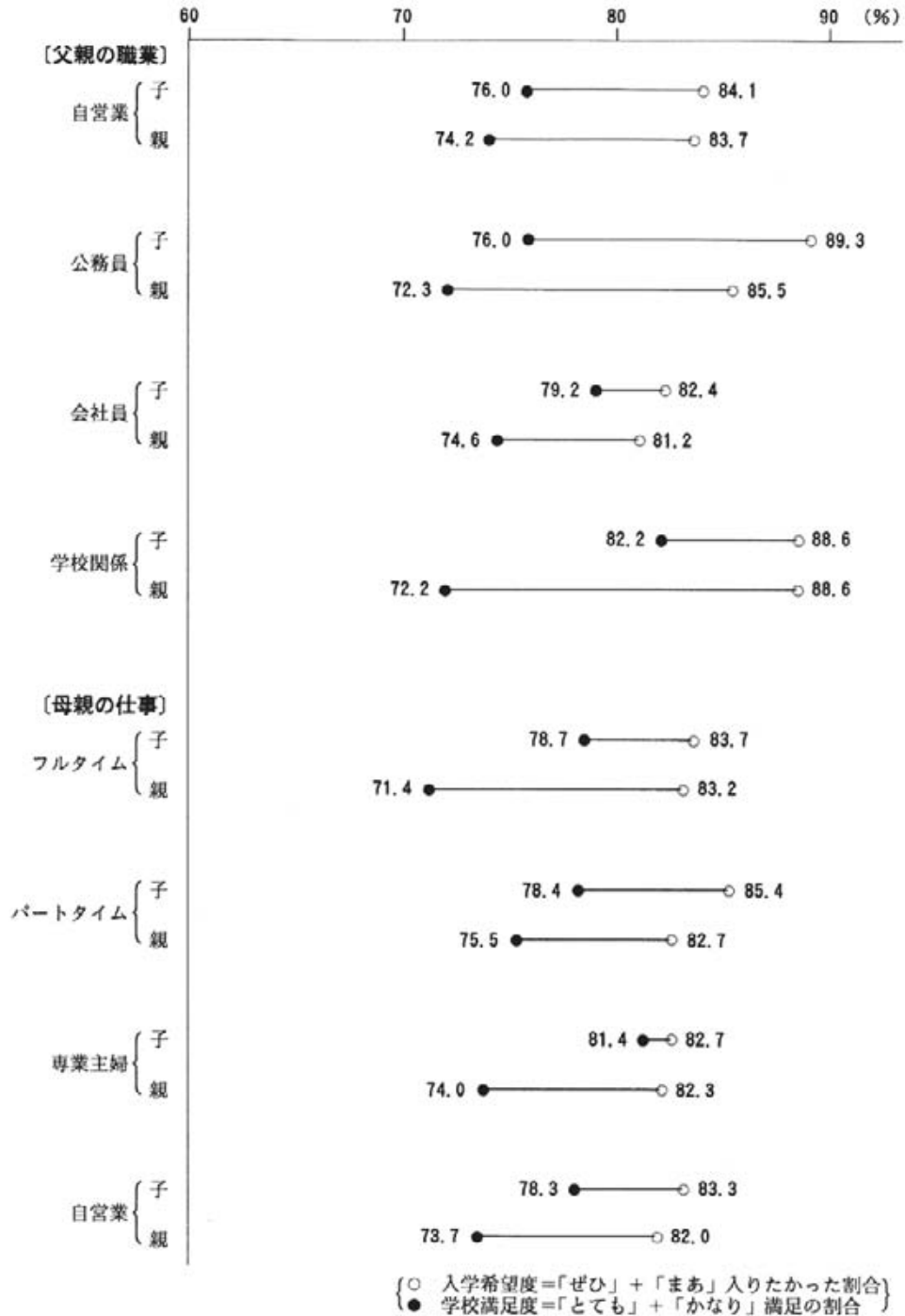
成績上位、中の上位の子どもは親ともどもあまり激しい落差がない。中位から下のほうは親子ともども希望度から満足度への落ち込みが激しい。成績下位の生徒では希望度も低かったが、満足度に大きな落差のあるのは何を意味するのだろうか。自分の力以上の所に入ってしまった後悔が意欲を失わせ、不満がくすぶり、成績を押し下げているのかもしれない。成績上位の子どもだけが希望度を上回る満足度を得ており、ますます成績が上昇するであろうことは間違いない。

中学時代に憧れを抱いた高校像と、入学してからの実像とのギャップが不満の原因であろうが、地方の名門進学校といえども、それは避けられないようである。しかし、やや満足度において落ちているとはいえ、親子とも7割以上が現在の学校に満足しているのは、さすがその地域の名門校であるといえる。

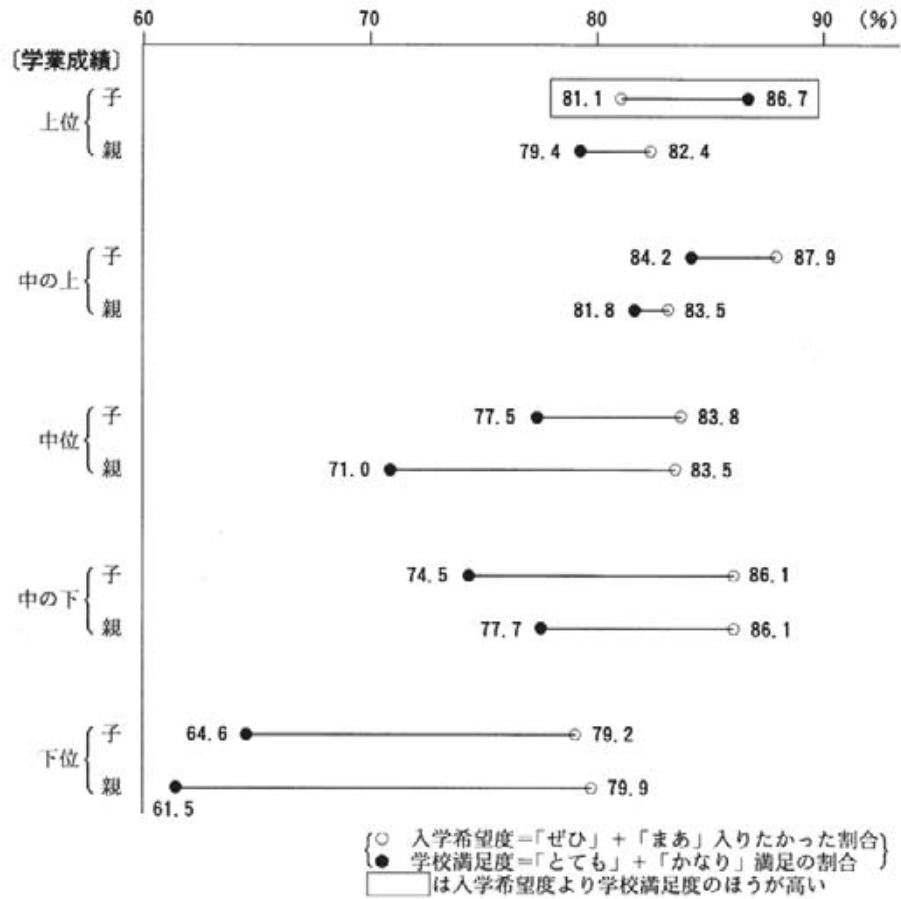
図IV-3 入学希望度・学校満足度 × 学歴



図IV-4 入学希望度・学校満足度 × 職業



図IV-5 入学希望度・学校満足度 × 成績



学校の教育指導が、既成の枠組みの中で行われることは当然との社会的認識があるが、現実には、その属性によってかなり期待に差のあることがこの調査でわかった。しかし、

教育が施設や体制にばかり依存するものではなく、個々の教師への期待のほうがもっと具体性を持ち、期待することが多いのではなかろうか。

第V章 高校教師に対する期待度とその背景



73.8%の親たちが現在子どもが通っている高校に満足していると答えているが、学校運営に携わっている教師に対しては、どのような期待を持っているのだろうか。そこで本章では、どのような親たちが、どのような期待

をもっているのかといった期待の中味とその背景や、その期待に応えるべき教師側の対応や意識とにずれはないだろうかといった視点から検討を加えてみたい。

1. 学校に対する現状認識

まず、親たちが子どもが通っている学校をどのように捉えているかの現状認識をみておこう。表V-1によれば、まじめな生徒が多く（「とても」と「まあ」そう思うの合計が86.7%、以下同じ）、学校は受験指導に熱心であり（84.4%）、地域の人からの評判もよく（80.5%）、教育熱心な親も多い（71.3%）申し分のない学校と考えていることがわ

かる。しかし、教える力のある先生はそれほど多いとはいえず（42.7%）、ユニークな先生も少ない（17.4%）とみている。

表V-2は、属性別にクロス集計した結果である。多くの項目で母親より父親のほうが評価が高い。年齢別では、51歳から55歳の高年齢層の評価が高いのに比べて、36歳から40歳の若い親たちの評価はかなり低い。学校満

足度別では、満足度順に数値差がはっきりと変化している。特に「とても」と「かなり」を合わせた満足層と「どちらともいえない」と「あまり」と「全然」を合わせた不満足層との間には、明確な落差がある。ここからは、

不満足層の親たちが特に体育祭・文化祭、部活動といった特別活動や、生活指導、教える力のある先生が多くないなど、教師の日常の指導に満足していないことが読み取れる。

表V-1 子どもの通っている学校の指導活動の現状認識

——まじめな生徒が多く、学校は受験指導に熱心であり、地域の評判もよい——
(%)

	とても そう思う	まあ そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全然そう 思わない
1. まじめな生徒が多い	19.9	66.8	10.6	2.6	0.1
	86.7			2.7	
2. 受験指導に熱心である	40.7	43.7	11.6	3.6	0.4
	84.4			4.0	
3. 地域の人からの評判がよい	28.0	52.5	17.1	2.1	0.3
	80.5			2.4	
4. 教育に熱心な親が多い	21.3	50.0	25.2	3.3	0.2
	71.3			3.5	
5. 体育祭・文化祭などに力を入れている	14.2	39.5	32.3	13.1	0.9
	53.7			14.0	
6. 部活動が盛んである	9.3	40.3	31.9	17.2	1.3
	49.6			18.5	
7. 社会の指導層として活躍する卒業生が多い	15.8	32.0	42.7	8.1	1.4
	47.8			9.5	
8. 生活指導に力を入れている	9.7	37.9	37.7	13.1	1.6
	47.6			14.7	
9. 教える力のある先生が多い	8.8	33.9	45.7	9.5	2.1
	42.7			11.6	
10. ユニークな先生が多い	4.0	13.4	56.2	22.1	4.3
	17.4			26.4	

表V-2 現状認識 × 属性

(%)

	全体	父親	母親	年 齢				学 校 満 足 度			
				36~40 歳	41~45 歳	46~50 歳	51~55 歳	とても 満足	かなり 満足	どちらとも いえない	あまり +全然 満足して いない
1. まじめな生徒が多い	86.7	90.3	>86.2	78.1	88.2	87.6	90.2	92.6	>88.8	>81.2	>>67.1
2. 受験指導に熱心である	84.4	84.8	>84.2	81.6	85.2	84.7	83.1	94.2	>88.7	>>72.3	>>>50.0
3. 地域の人からの評判がよい	80.5	83.9	>79.7	78.1	81.0	80.7	78.6	91.9	>84.2	>>67.1	>>>50.0
4. 教育に熱心な親が多い	71.3	71.7	>71.3	72.1	70.6	72.7	71.8	82.9	>74.8	>>55.9	>>>52.9
5. 体育祭・文化祭などに力を入れている	53.7	55.0	>53.5	55.0	52.3	57.0	57.7	67.8	>54.7	>>39.0	>>>34.3
6. 部活動が盛んである	49.6	47.0	<50.2	39.0	<<49.8	<52.5	<61.9	59.4	>48.6	>43.6	>37.1
7. 社会の指導層として活躍する卒業生が多い	47.8	59.3	>>45.6	46.1	47.7	45.9	57.9	69.6	>>47.4	>>>32.1	>>>>20.3
8. 生活指導に力を入れている	47.6	46.7	<47.9	46.1	45.6	53.0	49.3	61.7	>48.0	>>33.9	>>>30.4
9. 教える力のある先生が多い	42.7	50.2	>41.1	39.8	42.3	44.4	42.9	65.7	>45.2	>>20.3	>>>>8.6
10. ユニークな先生が多い	17.4	18.9	>17.0	15.7	16.6	19.2	18.6	28.9	>15.9	>10.8	>>5.7

(「とても」+「まあ」そう思う割合)
 > 10%未満の差を示す
 >> 10%以上の差を示す
 ○ は最大値 ~~~~~ は最小値

2. 教師への期待の中味

全体的にみて、前節では受験指導を除くと教師の熱意や教育力にそれほど満足していない親たちの現状が浮かんでいるが、では、親たちはどのような教師を望んでいるのだろうか。

(1) 高校教師として必要な資質

そこで、まず高校教師の資質として必要なものは何かと問うてみた。図V-1からは、わかりやすい授業ができて(「とても」と「かなり」必要の合計が82.5%、以下同じ)、真正面から生徒に取り組む情熱があり(73.5

%)、かつ生徒が気軽に雑談できる(67.0%)のような気さくな人柄の教師を親たちが求めていることがわかる。また、「クラスの運営がうまい」リーダー的な存在であってほしいとも思っている。

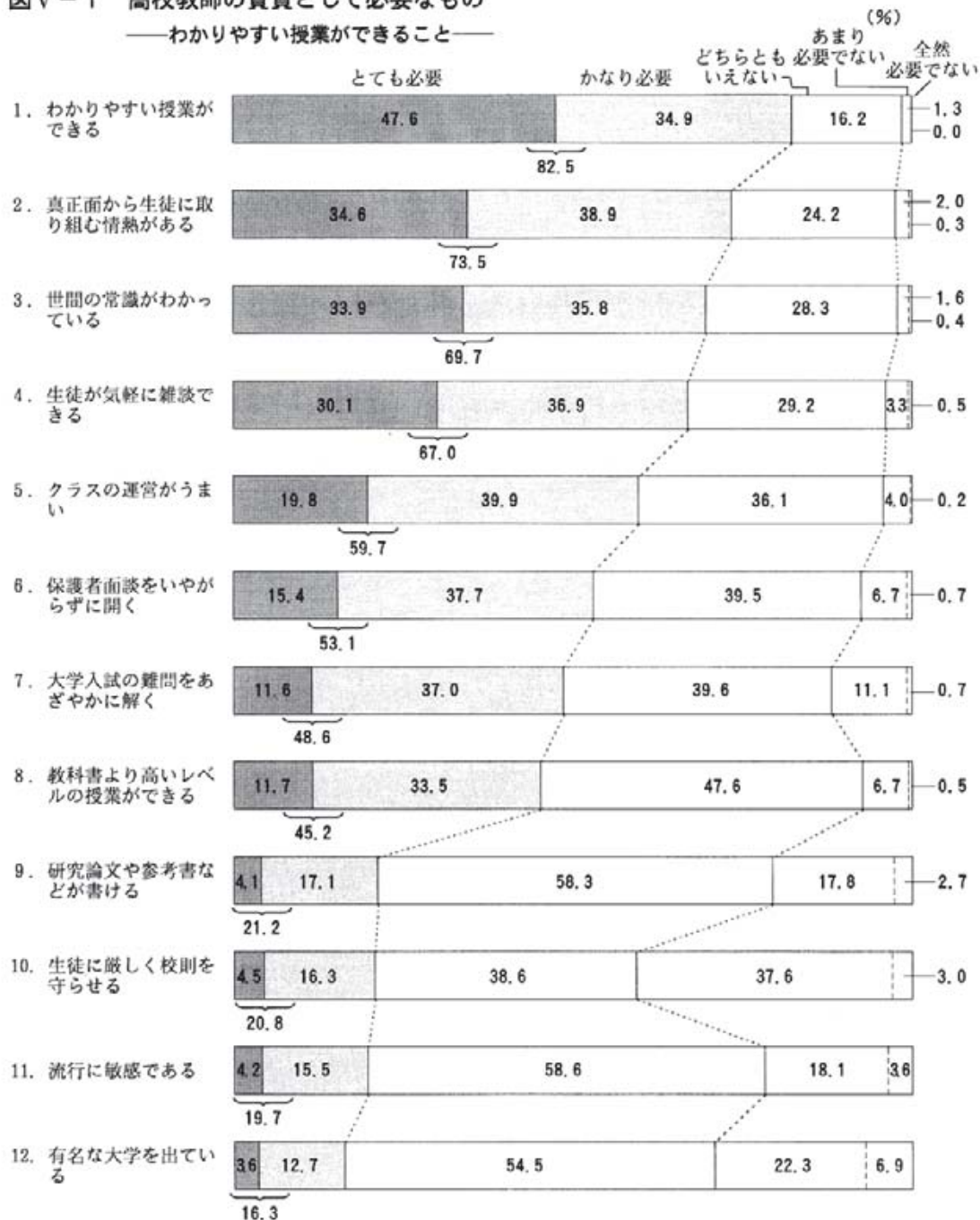
さらに、「世間の常識がわかっている」ことを69.7%の親が必要と考えている。この数値は、裏を返すと、常識がわかっていない教師がいることを暗に指摘しているともいえる。

一般に高校の教師たちが必要だと考えている、教科書より高いレベルの授業ができる能力(45.2%)や研究論文や参考書などを書く

ことができる高度な学力(21.2%)はあまり求めていない。つまり、親たちの考えている「教える力のある先生」とは、生徒にわかりやすい授業ができる教師をさしているといえ

よう。また、「生徒に厳しく校則を守らせる」ような管理教育には、必要20.8%に対して不必要40.6%と否定的であることが明確に示されている。

図V-1 高校教師の資質として必要なもの
——わかりやすい授業ができること——



(2) 教育に望むもの

次に、高校の教育において教師はどこに力を入れるべきだと、親たちは考えているのだろうか。図V-2をみると、最も望んでいるものは、専門知識の充実（「とても」と「かなり」望むの合計が61.4%、以下同じ）よりも基礎学力の充実（90.3%）だということがわかる。次いで、社会人としての常識を身につけさせ（80.4%）、その上で個性を伸ばし（79.7%）、大学入試にも力を入れてほしい（79.4%）と考えている。

専門知識の充実を望む割合が最も低いのは、それはむしろ大学や社会に出てから学ばせよと考えている親がかなりいるからであろう。高校は、大学進学のための通過点だという認識のあらわれともいえよう。

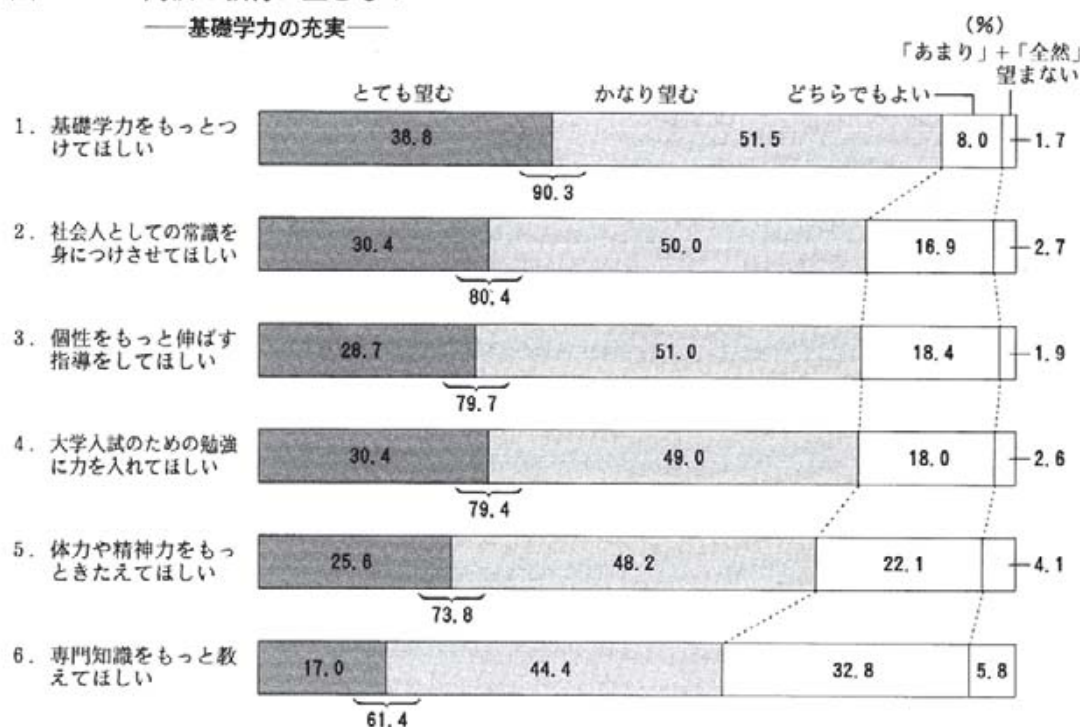
ところで、「基礎学力」という用語についてであるが、筆者たちは、受験以前の高校を

卒業する者として最低限必要な基本的な学力と認識していたが、回答してくれた親たちは受験に必要な学力と捉えてしまったようだ。したがって、どの属性の親たちも希望の第1位にあげる結果となったといえよう（表V-3参照）。

また、図V-3より高校教育に望むものを父親と母親で比較してみると、父親は、社会人としての常識を身につけさせ（83.8%）、個性をもっと伸ばす指導（81.4%）を重視していることがわかる。これに対して母親は、大学入試のための勉強（81.9%）、つまり進学指導の充実を強く望んでいる。

本調査に答えてくれた父親たちは、既述したように、かなり子どもの教育にも熱心で、学校にも関心をもっている意識の高い人々である。したがって、ここでの父親の意向がすべての父親の意見を代表するとは必ずしもいえないが、父親たちは、進学指導よりも社会

図V-2 高校の教育に望むもの



性や個性を伸ばす点により期待しているといえる。これは、家庭や地域の教育力がかつてより衰えている現状下では、学校に期待されているもう一つの重要な役割といえる。

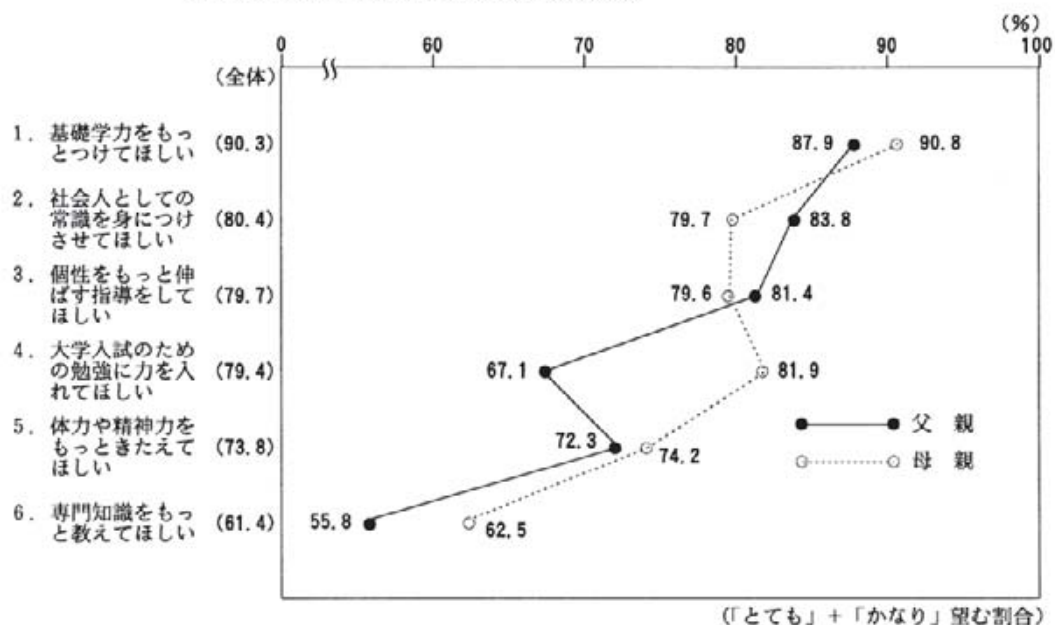
さらに、属性別に教育に望む順位を集計したのが表V-3である。この表では、1、2、3、4は望む割合の多い順に示した順位である。ここからは、41歳から45歳代の親で、父

親の職業が会社員、母親の仕事がパートタイムと専業主婦、父母の学歴が高卒層が、「大学入試のための勉強に力を入れてほしい」という項目を2位にあげていることがわかる。

受験教育への期待の高いこの層の親は、それぞれの属性の50%から60%を占めている。受験教育に対する学校への期待は、依然としてかなり強いといえる。

図V-3 高校の教育に望むもの

——父親は社会性や個性の伸長、母親は大学入試——



表V-3 属性別教育に望む順位

	53.3												(%)							
	(10.8) (51.3) (21.7) (5.4) (19.8) (12.8) (53.7) (6.4) (28.8) (29.8) (23.5) (12.1) (10.2) (48.6) (7.1) (32.3) (6.7) (60.8) (23.3) (8.0)			母親の仕事			父親の学歴			母親の学歴										
	年 齢			父親の職業			母親の仕事			父親の学歴				母親の学歴						
36~ 40歳	41~ 45歳	46~ 50歳	51~ 55歳	自営業	公務員	会社員	学校 関係	フル タイム	パート タイム	専業 主婦	自営業	中卒	高卒	短・専卒	大卒	中卒	高卒	短・専卒	大卒	
1. 基礎学力をもっとつけてほしい	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2. 社会人としての常識を身につけさせてほしい	2	3	3	2	4	3	3	2	4	3	3	2	4	3	2	3	4	4	2	2
3. 個性をもっと伸ばす指導をしてほしい	3	4	2	4	2	2	4	2	3	4	2	4	3	2	3	2	3	3	3	3
4. 大学入試のための勉強に力を入れてほしい	4	②	4	3	3	4	②	4	4	②	3	3	3	②	4	4	4	②	4	4

1 = 1位 2 = 2位 3 = 3位 4 = 4位 ②各属性の上の数値(%)は属性中に占める割合を示している。

(3) 授業に望むもの

次に、学校教育の基礎の1つである授業に対して親たちは、どのようなものを望んでいるかを問うてみた。図V-4は、単純集計の結果である。まず85.4%の親は、「教科書の内容をきちんと教えてほしい」と望んでいる。これに比して「教科書よりレベルの高い授業をしてほしい」と望んでいる親は、42.5%にすぎない。親たちの多くは、高校の授業は基本的に、教科書よりレベルの高いものよりも教科書にそって、その内容をきちんと教えてほしいと考えている。

授業の中味は、実用的な技術が身につく授業(47.5%)よりも、塾や予備校とは違うが(52.1%)、やはり受験に役立つ授業をしてほしい(74.0%)と望んでいる。そして、授業方法は、びしびしきたえる(42.4%)のではなく、ゆとりをもって学べる工夫をしてほしい(67.5%)と考えている。

教科書の内容がきちんと教えられたならば、親たちの思っている基礎学力がもっとつく親たちは意識しているといえよう。その背景には、各学校で教科書の全範囲が必ずしも完了していないという現状があるのかもしれない。

しかし、宿題をあまり出すことなく(「とても」と「かなり」望む親は20.1%にすぎない)、授業中びしびしきたえることもなく、しかもゆとりをもって授業を進めて、なおかつ受験に役立つ授業ができると本当に思っているのだろうか。親たちの期待は、やや矛盾

しているといえよう。

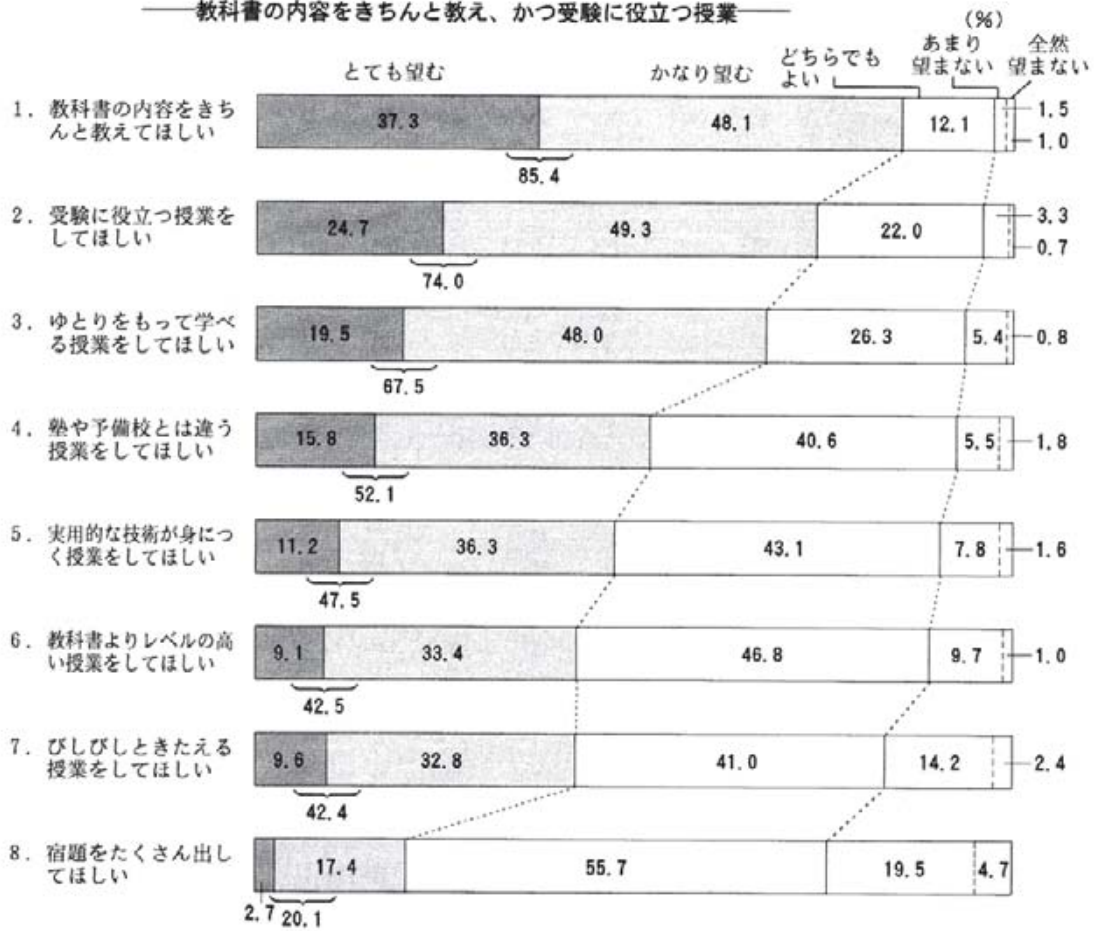
また、受験に役立つ授業を強く望んでいるということは、調査対象校が進学校であることを考慮すると当然の結果ともいえるが、受験指導に熱心であるという現状認識がありながら(表V-1参照)、なおかつさらに望んでいるということは、学校に期待しすぎであると評価するのは酷であろうか。大手予備校などの多い首都圏と少ない地方都市の学校との差のあらわれといえるかもしれない。

次に、表V-4により、属性別のクロス集計をながめておこう。「教科書の内容をきちんと教えてほしい」という項目は、母親の学歴では高卒以上、父親の学歴では短大・専門学校卒以上に多いことがわかる。一方、「受験に役立つ授業」は母親が強く望んでいる。学歴別では、大卒の母親や短大・専門学校卒以上の父親など高学歴層が意外に低いことがわかる。これは、高校だけに期待していたのでは必ずしも十分でないという受験経験者の実体験の反映といえよう。その一方、地方の進学校の母親の多くを占める高卒層および短大・専門学校卒層に、「受験に役立つ授業」への期待が最も強くあらわれている点も注目される。

また、実用的な技術が身につく授業については、中卒の母親は52.5%、父親は58.3%と平均より5%から10%以上高い数値を示している。義務教育だけで実社会に出ざるをえなかった人々にとっては、社会に出てすぐに役立つ実用的な技術教育も大切なのだという認識のあらわれともいえる。

図V-4 高校の授業に望むもの

——教科書の内容をきちんと教え、かつ受験に役立つ授業——



表V-4 高校の授業に望むもの × 属性

	全体	父親	母親	年 齢				母親の学歴			父親の学歴			学校満足度					
				36～ 40歳	41～ 45歳	46～ 50歳	51～ 55歳	中卒	高卒	短・専卒	大卒	中卒	高卒	短・専卒	大卒	とても満足	かなり満足	どちらでもない	あまり満足していない
1. 教科書の内容をきちんと教えてほしい	85.4	86.9 >	85.2	83.5	86.0 >	85.8 >	83.8	74.7	86.7	85.4	89.0	80.3	85.4 <	88.8	87.1	86.3 >	86.0 >	82.4	91.2
2. 受験に役立つ授業をしてほしい	74.0	60.5 <<	76.8	78.8 >	74.6 >	72.5 >	66.1	73.8	74.4 <	76.2 >	82.0	81.4 >	76.3 >	67.4	69.0	81.6 >	76.2 >	63.8	66.7
3. ゆとりをもって学べる授業をしてほしい	67.5	68.8 >	67.6	68.8 >	68.8 >	66.2 >	58.2	65.1	67.8	67.4	69.3	66.1	68.3 <	71.9	65.9	68.6 >	68.5 >	64.1 >	63.8
4. 塾や予備校とは違う授業をしてほしい	52.1	51.4 <	52.4	46.4	54.3 >	50.4 >	44.1	43.2	52.7 <	52.9	51.0	48.8	50.6 <	60.2	54.1	50.8	54.2 >	52.1 >	44.1
5. 実用的な技術が身につく授業をしてほしい	47.5	40.0 <	49.0	52.1 >	47.2 >	46.1 >	41.2	52.5 >	48.6 >	42.7 >	40.6	58.3	49.1	50.5 >	39.7	43.8 <	47.1 <	50.5	49.3
6. 教科書よりレベルの高い授業をしてほしい	42.5	36.4 <	43.7	47.1	42.5	39.1	44.2	34.9	40.1 <	49.5	43.6	47.2	39.0	47.2	44.7	49.7 >	40.6 >	35.1 <<	56.5
7. びびりしきたえる授業をしてほしい	42.4	41.1 <	42.4	34.7	43.4	43.8	36.7	40.9	41.7 <	43.4 <	43.5	45.6	38.9	47.2	44.0	43.9	41.7	44.0	42.0
8. 宿題をたくさん出してほしい	20.1	19.1 <	20.5	26.3	18.0	21.5	22.0	21.7 >	21.0 >	17.7 >	14.9	23.7 >	19.5 >	18.2	19.1	22.8	18.9	20.6	18.8

(「とても」+「かなり」望む割合)
 > 10%未満の差を示す
 >> 10%以上の差を示す
 □ は最大値 ~~~ は最小値

3. 望ましい担任像

3年間の学校生活の中で一番接触する機会が多いクラス担任としては、親たちはどのようなタイプの教師を望んでいるのだろうか。この点を問うてみたのが、表V-5である。まず、現役で志望校に合格できるように励まし(77.3%)、合格可能な受験校を明確に教えてくれる(76.4%)担任を望んでいることがわかる。さらに、個人的な悩みを相談できる相手でもあってほしい(72.5%)と。つまり、的確な進学指導能力とカウンセラー的役割を求めている。

図V-5により、中学校時代の担任と比較すると、中学時の担任には、カウンセラー的役割を第一とし(75.3%)、受験指導や親との緊密な関係や生徒の日常の基本的な生活指導など幅広い役割を望んでいたことがわかる。

高校の担任と親たちとの関係では、生活面や精神面の乱れの兆候を示すことのある遅刻、無断欠席などの連絡を求めている(64.5%)が、学外でもざっくばらんに話せる相手として必要なほどの親密度は期待していない(中学の担任51.2%、高校の担任37.0%)。さらに、行事にはクラスの先頭に立ってやってほしいと思うほど(中学の担任60.2%、高校の担任39.3%)クラス内のリーダー的役割も中学時ほどは求めている。

表V-6は、属性別のクロス集計の結果である。母親は、受かりそうな学校をはっきり教えてくれて、現役で合格するようハッパをかけてくれる担任を望んでいる。受験に一点集中的といえなくもない。これに比べて父親は、個人的悩みの相談相手や遅刻、無断欠席などの連絡を密にしてくれる担任を望んでい

る。つまり、父親は、生活面や精神面のカウンセラー的役割を含めた幅広い機能を担任に求めているといえよう。なお、このカウンセラー的役割を第1位に望んでいる親は、職業が学校関係者や短大・専門学校卒以上の父親、大卒の母親といった高学歴層に多いのが特徴である。

年齢別では、36歳から40歳代の若い親に各項目で望む割合が高い。これは、高校生をもった経験が少なく、最初の子どもである場合が多いからであろうと想像できる。また、教育や授業にも期待する割合が高いことを考慮すると、この年代の親たちの学校依存度はかなり高いといえる。

学歴では、父母ともに中卒者の望む割合が高く、大卒者の望む割合は、「個人的な悩みの相談相手になってほしい」という項目を除くと10%近く低いことがわかる。これは、高校生活の実体験のない中卒の親たちにとっては、自分の学歴を超えた子どもたちの教育の多くの部分を、学校や担任に期待せざるをえないという状況の反映といえよう。

学校満足度別では、「とても満足」層の望む割合が高いのはわかるが、「あまり」と「全然」を合わせた不満足層も必ずしも低いとはいえない。4項目目と7項目目の教師と親との緊密な接触については、むしろ一番望む割合が高い。この層は、学校に期待しないのではなく、むしろ積極的な不満があって、それを解決してほしいと期待しているといえる。こうした層の不満を的確に受け止めるための教師側の努力が今後必要ではないだろうか。

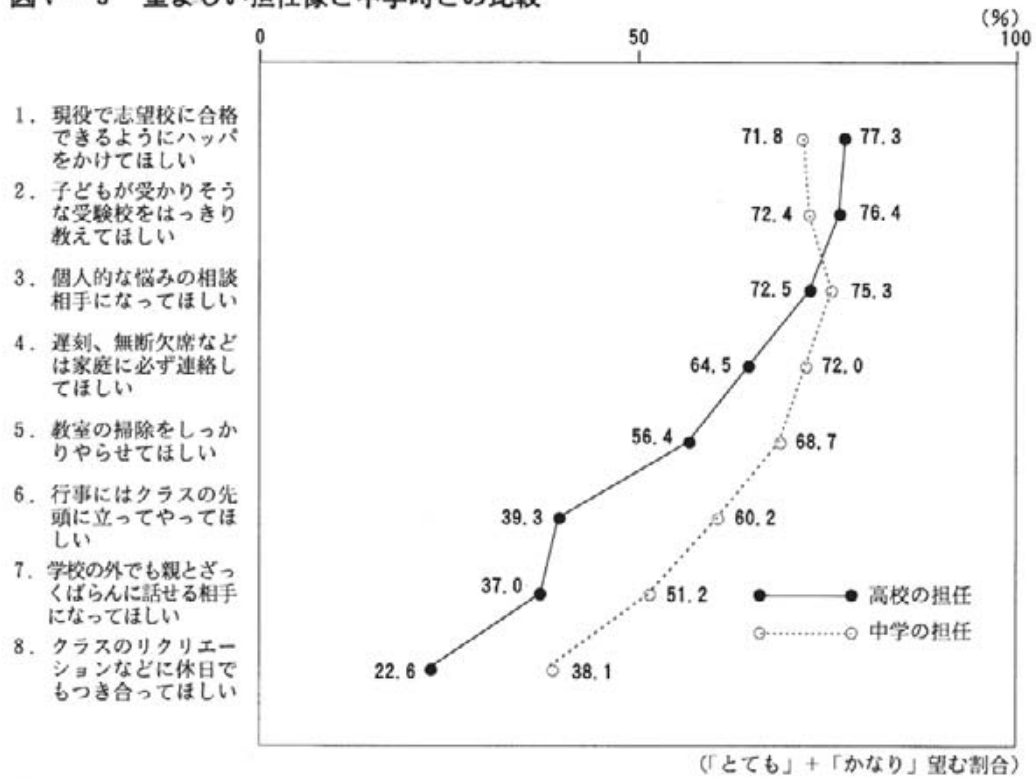
表V-5 望ましい担任像

—的確な進学指導能力とカウンセラー的役割—

(%)

	とても望む	かなり望む	どちらでもよい	あまり望まない	全然望まない
1. 現役で志望校に合格できるようにハッパをかけてほしい	28.3	49.0	18.1	4.0	0.6
	77.3			4.6	
2. 子どもが受かりそうな受験校をはっきり教えてほしい	29.1	47.3	19.3	3.4	0.9
	76.4			4.3	
3. 個人的な悩みの相談相手になってほしい	22.6	49.9	22.8	3.6	1.1
	72.5			4.7	
4. 遅刻、無断欠席などは家庭に必ず連絡してほしい	20.7	43.8	25.1	8.3	2.1
	64.5			10.4	
5. 教室の掃除をしっかりとやらせてほしい	12.2	44.2	35.9	7.0	0.7
	56.4			7.7	
6. 行事にはクラスの先頭に立ってやってほしい	11.4	27.9	48.2	10.5	2.0
	39.3			12.5	
7. 学校の外でも親とざっくばらんに話せる相手になってほしい	7.7	29.3	47.7	11.1	4.2
	37.0			15.3	
8. クラスのリクリエーションなどに休日でもつき合ってほしい	4.5	18.1	53.9	17.6	5.9
	22.6			23.5	

図V-5 望ましい担任像と中学時との比較



表V-6 望ましい担任像 × 属性

	全体	父親	母親	年齢				父親の学歴			母親の学歴				学校の満足度				
				36~40歳	41~45歳	46~50歳	51~55歳	中卒	高卒	短・専卒	大卒	中卒	高卒	短・専卒	大卒	とても満足	かなり満足	どちらでもない	あまり+全然満足していない
				(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
1. 現役で志望校に合格できるようにハッパをかけてほしい	77.3	65.9	79.5	81.9	78.2	75.0	67.6	86.0	79.0	77.3	72.5	73.3	79.5	75.1	66.3	80.7	78.0	73.9	71.4
2. 子どもが受かりそうな受験校をはっきり教えてほしい	76.4	66.9	78.4	81.9	78.2	70.2	69.0	84.5	79.0	76.1	71.0	81.4	78.0	74.8	62.4	80.4	77.2	72.1	70.0
3. 個人的な悩みの相談相手になってほしい	72.5	73.3	72.6	70.3	74.6	69.5	66.2	71.4	71.7	79.6	73.5	65.2	73.2	71.8	77.3	74.5	73.8	67.1	71.4
4. 遅刻、無断欠席などは家庭に必ず連絡してほしい	64.5	69.6	63.0	68.1	64.4	62.0	62.0	66.2	65.0	71.6	61.9	65.5	66.0	60.9	61.4	69.4	63.3	59.5	70.0
5. 教室の掃除をしつかりやらせてほしい	56.4	58.4	55.9	55.9	56.8	53.8	64.8	64.0	56.3	64.7	52.5	66.3	55.6	56.5	53.5	61.0	55.7	54.9	50.0
6. 行事にはクラスの先頭に立ってやってほしい	39.3	43.3	38.6	39.1	38.9	39.4	39.5	45.8	37.7	36.4	39.5	41.8	38.8	39.1	37.0	45.4	38.6	34.6	37.1
7. 学校の外でも親とざっくばらんに話せる相手になってほしい	37.0	44.3	35.5	43.5	36.2	33.7	42.3	46.1	37.2	36.3	33.7	37.7	36.8	36.4	33.7	42.6	34.3	34.2	45.7
8. クラスのリクイエーションなどに休日でもつき合ってほしい	22.6	28.1	21.5	29.7	21.8	21.5	16.9	26.6	22.8	21.6	20.0	25.9	22.1	22.8	15.9	26.9	22.0	17.5	25.7

(「とても」+「かなり」望む割合)
 > 10%未満の差を示す
 ≧ 10%以上の差を示す
 ○ は最大値 ~~~ は最小値

4. 生徒指導に対する親の意識

時として親たちと意見の食い違いが起こる生徒指導については、どのような措置が親側としては適当だと思っているのだろうか。この点を問うてみたのが表V-7である。

現実には起こりえる事例をあげてみた。表中の太枠に注目していただきたい。「授業中の内職を注意され、先生に反抗した」(64.7%)、「学級懇談会の案内を親に見せないで欠席にした」(55.5%)、「学生ズボンやスカートの形を変えた」(51.2%)の3つについては、「全く問題にしない」から「担任から生徒にだけ注意する」までの処理でよいという意見が過半数を占めた。

「学期末に赤点の成績をとった」(89.2%)と「授業をさぼって、予備校に通った」(83.5%)の2つは、「担任から生徒にだけ注意する」と「担任から生徒に注意し家庭にも連絡する」に意見が集中した。「コンパや行事の打ち上げで酒を飲んだのを知られた」(80.4%)、「しょっちゅう遅刻ばかりしている」(83.0%)、「学校の外でタバコを吸っているのを先生に見られた」(84.1%)、「毎日同級生をいじめていた」(91.0%)の4つは、「担任から生徒に注意し家庭にも連絡する」と「親も学校に来てもらう」の措置が適当と考えている。

ところで、2項目目の事例では、生徒と親の意思の疎通が緊密であれば、起こりえない事柄であるから、本来は家庭で処理されるべきであろうと考えられるが、40%以上の親は学校側の指導に期待している。やや学校に依存しすぎではないだろうか。

一方で、6項目目の飲酒や8項目目の喫煙といった明らかに高校生としては違法行為に対して、飲酒では19.6%、喫煙では15.9%と2割弱の親は、担任から生徒に注意する程度の指導でよいと考えている。ここには、保護

者である親の役割を自覚しているのかとやや疑いたくなるような意向が示されている。確かに飲酒・喫煙が低年齢化しているのが実情であるからといって、それを教育現場で容認していいことにはならないと考えるのは筆者だけだろうか。

生徒指導については、予想以上に親たちが学校の厳しい措置を認める傾向が強いことが9項目の事例に対する対応からは読み取れた。しかし、一部の項目については親と学校側の意向に齟齬(そご)が来つつあることも確かといえよう。

次いで、表V-8により、属性別の特徴をみておこう。ここでは、「担任から生徒に注意し家庭にも連絡する」と「親も学校に来てもらう」という厳しい指導を適当と考える数値の合計をあげてある。

まず、母親に比べて父親が厳しい指導を容認していることがわかる。母親の学歴では、中卒層は、授業中や校内で先生に反抗したりしないで、身だしなみは整えなければならないが、酒・タバコなどは大目にもみていいのではないかと考えているようだ。一方、大卒層は、服装など身だしなみはもっと自由でもよいが、飲酒・喫煙などの明らかな違法行為には厳しくすべきだと考えているようだ。なお、高学歴層はあまり学校の指導に期待していないのではないかと筆者たちは当初考えていたのだが、このデータからは、必ずしもそうとはいえないことが示されている。

表V-9は、同様の項目についての属性別のクロス集計の結果である。特に、クラス担任に遅刻、無断欠席などの家庭連絡を望むか望まないか(表V-5参照)と生徒指導事例の6項目目のコンパや行事の打ち上げで酒を飲んだ際の対応別(表V-7参照)に注目すると、はっきりと学校側の指導に対する意向

に落差があることがわかる。つまり、遅刻、無断欠席の連絡を望まない層（「あまり」と「全然」望まないの合計で10.4%いる）と飲酒の指導は担任から生徒にだけ注意するまでの対応でよいと考えている層（19.6%いる）は、学校の厳しい生徒指導には大変反対であることがわかる。

最後に、若干のまとめを述べておきたい。全体を通じて親たちは、筆者たちが当初思っていた以上に、教師や教師を含む学校の生徒指導に多くを期待していることがわかった。ただし、期待の中味は必ずしも一様ではない。回答者のうち81.9%を占める母親の学歴でみると、60.8%の高卒層は大学入試のための勉強にもっと力を入れてほしいし、受験に役立つ授業をしてほしい。担任には、志望校に現役で合格するようハッパをかけてほしいと思っている。この層は、自身が達成できなかった高学歴を子どもに期待しているといえ

る。そして教師の進学指導に一番期待している層なのである。この層の過大な要求をある程度整理することも、受験一辺倒の教育に陥らせないためには必要ではないだろうか。

一方、8.0%の大卒層は、社会人としての常識を身につけさせてほしいし、ゆとりをもって学べる授業をしてほしいと、担任にはカウンセラー的役割を期待している。この層は子どもの大学進学は当然と考え、高校生としての発達段階や高校の多様な役割を認識しているのではないだろうか。ただし、一面では受験指導は学校だけでは十分でないと考えているのかもしれない。今後、大卒層の期待に応えられるような教師側の研修の充実や意識改革も必要といえる。

高校の果たす役割は、生徒の志望進路の実現と全人格的成長を手助けすることにある。筆者等現場の教師は、現実を踏まえつつも、この2点をできるだけ等分に達成させられるよう努力をしたいと考えている。

表V-7 生徒指導に対する親の意向

(%)

	全く問題にしない	見て見ぬふりをしておく	担任から生徒にだけ注意する	担任から生徒に注意し家庭にも連絡する	親も学校に来てもらう
1. 授業中の内職を注意され、先生に反抗した	3.0	2.8	58.9	31.3	4.0
2. 学級懇談会の案内を親に見せないで欠席にした	8.7	5.8	41.0	43.0	1.5
3. 学生ズボンやスカートの形を変えた	6.7	3.9	40.6	43.8	5.0
4. 学期末に赤点（落第点）の成績をとった	2.4	1.7	42.5	46.7	6.7
5. 授業をさぼって、予備校に通った	2.4	3.4	22.3	61.2	10.7
6. コンパや行事の打ち上げで酒を飲んだのを知られた	1.0	2.2	16.4	51.6	28.8
7. しょっちゅう遅刻ばかりしている	1.3	0.6	15.1	72.0	11.0
8. 学校の外でタバコを吸っているのを先生に見られた	0.5	0.7	14.7	54.5	29.6
9. 毎日同級生をいじめていた	0.5	0.2	8.3	49.1	41.9

表V-8 厳しい指導を求める（「生徒に注意、家庭にも連絡」と）× 属性イ
 （「親も学校に来てもらう」の合計）

	全体	父親	母親	年 齢			父親の学歴				母親の学歴				
				36～40歳			中卒	高卒	短・専卒	大卒	中卒	高卒	短・専卒	大卒	
				41～45歳	46～50歳	51～55歳									
1. 授業中の内職を注意され、先生に反抗した	35.3	48.3 >>	32.2	28.6 <	35.8	33.6 <<	44.1	38.5	35.0	39.5	32.8	50.0 >>	34.5 >	31.0	34.3
2. 学級懇談会の案内を親に見せないで欠席にした	44.5	60.0 >>	41.1	38.8 <	46.1	41.7 <	48.6	40.2 <	42.7 <	48.9	48.0	50.6 >	43.1 >	40.9 <<	55.0
3. 学生ズボンやスカートの形を変えた	48.8	54.0 >	48.2	50.0 >	49.7 >	47.6 >	42.0	62.5 >>	49.4	50.0	44.5	59.5 >>	49.0 >	46.3 >	46.0
4. 学期末に赤点（落第点）の成績をとった	53.4	57.0 >	53.3	47.5 <	54.3	51.5 <<	62.3	56.3 >	52.8	53.4	52.9	51.8 <	54.2	48.5 <<	61.6
5. 授業をさぼって、予備校に通った	71.9	68.5 <	72.7	72.6 <	73.9	68.5 <	70.5	75.2	70.7	78.4	73.5	64.3 <<	74.6	71.7	66.0
6. コンパや行事の打ち上げで酒を飲んだのを知られた	80.4	79.9 <	81.1	82.2	82.9 >	75.7 >	73.9	80.3 <	81.2 <	83.0	80.2	75.9 <	81.1	80.9 <	82.0
7. しょっちゅう遅刻ばかりしている	83.0	85.4 >	82.7	80.2 <	84.2	80.5 <<	92.8	84.5 >	82.9 >	82.7	83.8	78.6 <	84.1 <	84.4	80.0
8. 学校の外でタバコを吸っているのを先生に見られた	84.1	85.0 >	84.2	86.5 >	85.3 >	80.4	84.1	87.5	82.1	88.6	86.2	80.7 <	83.7 <	87.1	87.0
9. 毎日同級生をいじめていた	91.0	92.6 >	91.0	90.1	92.0	89.6	91.3	91.5	90.3	90.9	93.1	90.4 <	91.2 <	92.2 <	93.0

> 10%未満の差を示す
 >> 10%以上の差を示す
 □ は最大値 ~~~ は最小値

表V-9 厳しい指導を求める（「生徒に注意、家庭にも連絡」と）× 属性(口)（「親も学校に来てもらう」の合計）（％）

	全体	学校満足度				P.T.A役員歴			運朝・無断欠席の連絡			コンパの指導			
		とても満足	かなり満足	どちらでもない	あまり満足していない	現在もこれまでも	現在	これまで	やったことない	望む	どちらでもよい	望まない	担任まで	家庭にも連絡	親に学校に来てもらう
1. 授業中の内職を注意され、先生に反抗した	35.3	38.2	> 35.1	> 31.5	< 34.2	38.4	> 29.6	< 33.9	< 39.6	41.3	> 25.3	> 23.0	17.1	< 34.3	< 48.8
2. 学級懇談会の案内を親に見せないで欠席にした	44.5	45.8	> 44.1	> 41.7	< 47.8	50.4	> 41.0	< 43.5	< 44.1	53.0	> 30.3	> 25.9	30.8	< 43.0	< 56.4
3. 学生ズボンやスカートの形を変えた	48.8	51.6	> 48.6	> 47.9	> 47.2	51.5	> 41.0	< 48.5	< 54.2	54.6	> 43.6	> 26.4	18.7	< 49.7	< 67.8
4. 学期末に赤点(落第点)の成績をとった	53.4	52.2	< 53.5	< 55.2	51.5	52.9	50.8	54.1	51.7	57.5	> 49.2	> 38.8	35.3	< 54.2	< 64.5
5. 授業をさぼって、予備校に通った	71.9	72.9	> 74.7	> 68.6	> 60.0	77.5	> 69.3	< 71.7	< 72.8	76.9	> 67.1	> 54.6	48.2	< 75.5	< 81.5
6. コンパや行事の打ち上げで酒を飲んだのを知られた	80.4	78.2	< 82.9	80.6	72.5	84.8	72.9	81.6	78.3	84.3	> 76.1	> 67.9	-	-	-
7. しよっちゃっ運朝ばかりしている	83.0	84.8	> 83.1	> 81.8	> 81.5	86.3	83.1	83.7	79.8	88.9	> 75.2	> 68.6	63.6	< 85.0	< 92.6
8. 学校の外でタバコを吸っているのを先生に見られた	84.1	84.5	84.0	87.4	75.4	89.8	83.0	83.8	83.8	86.5	> 84.4	> 71.6	39.6	< 92.8	< 99.0
9. 毎日同級生をいじめていた	91.0	91.7	91.0	92.2	88.5	94.9	85.6	92.5	86.7	91.9	> 90.8	> 87.3	73.9	< 93.3	< 98.4

> 10%未満の差を示す

>> 10%以上の差を示す

○ は最大値 ~~~ は最小値